

全国54,000人の“海の救難ボランティア”の活動を支えます。

## 「青い羽根募金」にご協力を



僕はホームベースを  
海の安全は、この羽根が守ります。



青い羽根募金アドバイザー  
城島 健司 選手

### ■募金の方法

#### 口座振込みによる募金

##### 郵便局

口座番号 00120-4-8400  
加入者名 社団法人 日本水難救済会

##### 銀行

三井住友銀行 日本橋東支店  
口座番号 (普)7468319  
加入者名 社団法人 日本水難救済会  
青い羽根募金口

#### インターネット募金



- ホームページから以下の方法で募金ができます。
- クレジットカードはMasterCard、VISA、JCB、AMEXがご利用できます。
- NTTコミュニケーションズが提供するネット専用電子マネー「ちょコム」がご利用できます。

● お問い合わせ先 ☎0120-01-5587

募金フリーダイヤルでお申し出ください。振込料無料の専用郵便振替用紙をお送りします。



### 社団法人 日本水難救済会

〒102-0083 東京都千代田区麹町4丁目5番地 海事センタービル7階

TEL: 03-3222-8066 FAX: 03-3222-8067

<http://www.mrj.or.jp> E-mail [V1161@mrj.or.jp](mailto:V1161@mrj.or.jp)



「このイベントは競艇の交付金による日本財団の助成を受けて実施します」

平成21年度  
日本財団 The Nippon Foundation 助成事業



# マリンレスキュー ジャーナル

Vol 102 No 1  
2010 1月号

## 特集 MRJ 120年の歩み



マリンレスキュー紀行  
海の安全にかける  
男たちの群像

NPO長崎県水難救済会  
稲佐救難所 / 三重救難所

MRJ歴史探訪シリーズ第2回

## 金刀比羅宮所蔵の 「海難絵馬」



### 社団法人 日本水難救済会

マリンレスキュージャパンは、(社)日本水難救済会の変称です。

## 名誉総裁 年頭挨拶



新年明けましておめでとうございます。

日本水難救済会が平成21年11月3日で  
創立120周年の節目を迎えましたことは  
誠に喜ばしく、先人のご努力に  
敬意を表するものでございます。  
先人の海を愛する心と奉仕の精神は  
今日まで脈々と受け継がれております。  
本年も、全国の救難所員の皆様が、  
海上における人命、船舶の救済に力を尽くし、  
海上産業の発展と海上交通の安全確保に  
寄与されますとともに、  
国民の皆様から益々信頼され、  
発展を遂げられますことを願っております。

平成22年1月1日

社団法人 日本水難救済会  
名誉総裁 憲仁親王妃久子

## 年頭挨拶



社団法人 日本水難救済会  
会長 相原 力

本年も、海上の安全と  
安心のためのご活躍を  
祈念申し上げます。

平成22年の年頭を迎え、謹んで新年のご挨拶を申し上げます。全国の救難所員の皆様におかれましては、昼夜を問わず海難救助出動などでご尽力いただいておりますことについて、先ず以て感謝申し上げます。

当会は、古来より海の護り神として広く知られる讃岐金刀比羅宮の宮司琴陵有常氏の発起で讃岐琴平の地で発会し、昨年11月3日に創立120周年の節目を迎えました。初代の有栖川宮威仁親王殿下以来、歴代総裁に皇族を推戴してきた由緒ある団体で、平成13年からは、海へのご関心の深い高円宮憲仁親王殿下に初代名誉総裁にご就任いただき、突然の高円宮憲仁親王殿下のご薨去という悲しみを経て、二代名誉総裁に憲仁親王妃久子殿下にご就任いただき現在に至っております。私は当会の由緒ある歴史と社会に貢献してきた実績に大きな誇りを覚えますとともに、皆様のご活躍ぶりに接し、創立以来戦時中の困難な時期においてさえも発揮された崇高なボランティア精神が今日まで脈々と受け継がれていることを強く実感しております。

皆様の海難救助出動状況を見ますと、海難の状況はさまざまですが、その状況に応じて適切な方法を駆使して人命救助などに立ち向かう積極的な姿勢がうかがわれ、頭の下がる思いでございます。昨年は11月末までに、全国で328件の海難に出動し、321名、175隻を救助し、沿岸の海難救助に多大な成果を上げることができました。特に、2件の海難救助については心肺停止状態の人に蘇生術を施し息を吹き返させるなど、平素の訓練が功を奏した事例も見られ、救難訓練のみならず人命救

助訓練の大切さを改めて認識した次第でございます。最近、我が国では異常ともいえる気象状況が多く見られるようになっております。皆様が救助に向かわれる際には、より一層注意され、救助活動に当たるようお願いいたします。

また、発足して24年を数え、世界に類を見ない洋上救急事業については、昨年11月末までに延べ682件の出動が行われ、海上で生活する人たちの安全と安心を提供して高く評価されており、今後とも本会の主要事業の一つとして本制度を的確に推進して参りたいと思っております。

青い羽根募金につきましては、最近においては特に青い羽根募金支援自動販売機の設置が進み、既に全国で310台設置されており、同自販機を通じての募金が全体の二割を占めるまでになり、さらなる拡大を期待しているところです。

当会は、海上保安庁をはじめ関係官庁、都道府県、日本財団や日本海事センターその他の諸団体のご指導ご支援により事業を運営しているところですが、今後とも事業項目や運営方法に一層の工夫をし、的確に事業を推進していくとともに、公益法人改革に伴う公益社団法人への移行作業についても、適切に進めていく所存であります。

最後に、地方水難救済会をはじめ、各救難所・支所の皆様のご健勝とご活躍、そして皆様にとりまして今年がより良い歳となりますことをご祈念申し上げます。新年のご挨拶といたします。



海上保安庁  
長官 鈴木 久泰

さらに迅速かつ効率の良い  
捜索救助の実現に向けて、  
今年も皆様のご活躍を  
お願い申し上げます。

新年明けましておめでとうございます。  
平成22年の年頭に当たり、謹んで新年のご挨拶を申し上げます。  
社団法人 日本水難救済会におかれましては、明治22年の創設以来、崇高なボランティア精神のもと水難救済事業を展開され、これまでに、約19万名に及ぶ尊い人命と約3万9千隻の船舶を救助するなど、輝かしい歴史と伝統を築き上げ、創立120周年を迎えられましたことを、心からお慶び申し上げます。  
これも一重に、全国各地で昼夜を問わず、海上荒天の中、救助活動に従事していただいている約5万4千名の救難所員の方々やその活動を支援していただいているご家族様、救難所・支所、地方水難救済会をはじめとする関係者の皆様のご地道な努力の賜物であり、心から敬意を表する次第であります。  
また、洋上救急事業におきましても、昭和60年の運用開始以来、出動件数は682件に達し、710名を超える傷病船員の方々に救助するなど、洋上における救急救命に大きな役割を果たしていただいております。海を職場とする船員の方はもちろん、ご家族や関係者にとりましても非常に心強い制度であり、内外各方面から高い評価を受けているところであります。  
これは、本来業務多忙な中、巡視船や航空機に同乗のうえ、遙か洋上まで往診等の労に当たっていただいている医師・看護師の方々や医療機関等関係者の皆様のご理解、ご協力により成し得たものであり、深く感謝申し上げます。  
さて、我が国周辺海域におきましては、年間(平成16年から20年までの5ヶ年平均)船舶海

難により約120名の方が、また、海浜事故等により約1,400名の方が不幸にも亡くなられており、こういった事故が跡を絶たないのが実情であります。  
このため、海上保安庁では、広大な我が国周辺海域で多発する船舶海難や海浜事故等に迅速・的確に対応していくため、老朽・旧式化した巡視船艇・航空機の代替整備を進めるとともに、「空き巡視艇ゼロ」を目指した複数クルー制の拡充やヘリコプターからの降下、潜水、救急救命といった救助技術を有する機動救難士を主要航空基地に配置するなどの取り組みを行い、より迅速かつ効率的な捜索救助体制の充実強化に鋭意努力しているところであります。しかしながら、海上保安庁の保有勢力のみではその対処能力にも限界がありますので、全国各地の水難救済会による捜索救助活動や洋上救急事業は、要救助者はもちろん海上保安庁にとりましても誠に頼もしい限りでございます。  
このような水難救済会の活動は、関係者の皆様方の崇高で献身的な奉仕活動に支えられていることを改めて思い起こし、海上保安庁といたしましても誠心誠意ご支援させていただくとともに、緊密な連携のもと、海上における人命および財産の救助に万全を期して参る所存でございますので、引き続き、皆様方のご協力の程、よろしくお願い申し上げます。  
最後に、全国各地において、献身的にご尽力されている救難所員、医師・看護師等関係者の皆様のご健勝と、貴会のますますのご発展を祈念いたしまして、私の新年の挨拶とさせていただきます。



社団法人 日本水難救済会  
理事長 坂本 茂宏

公益社団法人への移行に向けて、  
さまざまな取組みを推進します。

平成22年の年頭に当たり、謹んで新年のご挨拶を申し上げます。  
日本水難救済会は昨年11月3日に創立120周年の節目を迎えましたが、この間全国の救難所の皆様のご労苦により我が国の水難救済事業は的確に推進されており、改めて厚くお礼を申し上げます。  
当会は創立以来、諸先輩が築き上げられた水難救済の精神をしっかりと受け継ぎ現在に至るわけですが、一方で、地方組織の基盤強化を図るため、平成13年2月に全臨海都道府県41ヶ所に地方組織の整備が完成するなど、当会を取り巻く情勢の変化にも柔軟に応じてきたところとす。現在本会におきましては、公益法人改革への対応等の喫緊の課題があり、適切に対処するとともに事業をさらに発展させ、次世代に伝えていく義務があると考えているところでございます。  
昨今の当会の状況をご紹介します。先ず、当会の運営に大きく寄与しております青い羽根募金ではありますが、平成9年にNPO長崎県水難救済会で取組みが始まった青い羽根募金支援自動販売機の設置も昨年11月末で310台を数え、募金に大きく寄与しております。設置に関係された地方水難救済会と海上保安官署の方々に改めてお礼申し上げますとともに、今後ともさらなる拡大をお願いするところでございます。一方、今後の課題としては、集まった浄財をさらに効果的かつ計画的に活用すべく、常に知恵を絞って行く必要があると思っております。  
次に、先述の公益法人制度改革についてご紹介いたします。当会は、移行期間5年間の早

い時期に必要な手続きを行い、「公益社団法人」に移行すべく定款の改正、関係諸規則の制定・改正等の作業を行っております。  
新公益法人制度施行後1年を迎えて、公益認定等委員会の池田委員長は、「公益認定は、公益法人として活動を行うためのスタートラインです。芸術・文化や教育、スポーツ、国際交流、医療、福祉など、これからの時代に求められる分野で多様な新公益法人が生まれ、暖かみと深みのある社会を作るための原動力となることを期待しています。」と談話の中で述べられています。当会の行っている水難救済事業は、時代が移り変わってもその本質である人命救助という崇高なボランティア精神にはいささかの变化はなく、暖かみのある社会に今後とも寄与し続けるものと思っております。  
終わりに、地方水難救済会をはじめ、各救難所・支所の皆様のご健勝とご活躍、そして皆様にとりまして今年がより良い歳となりますことを祈念し、新年のご挨拶といたします。

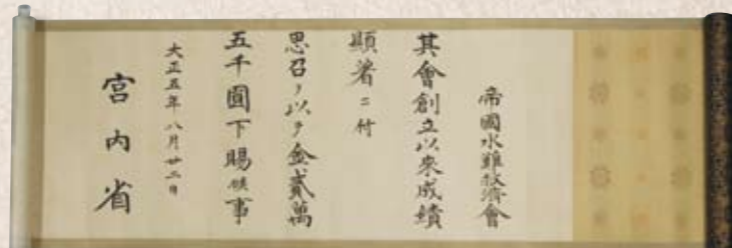
海を愛し、海の安全を守る奉仕の精神

# MRJ 120年の歩み

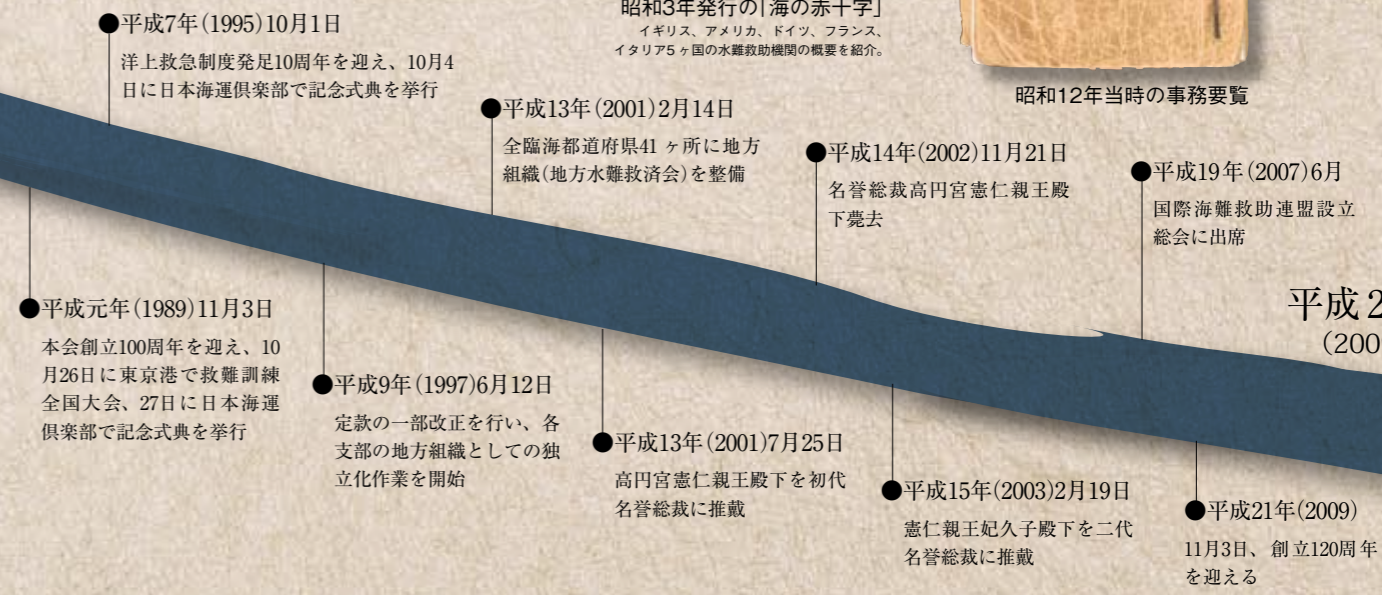
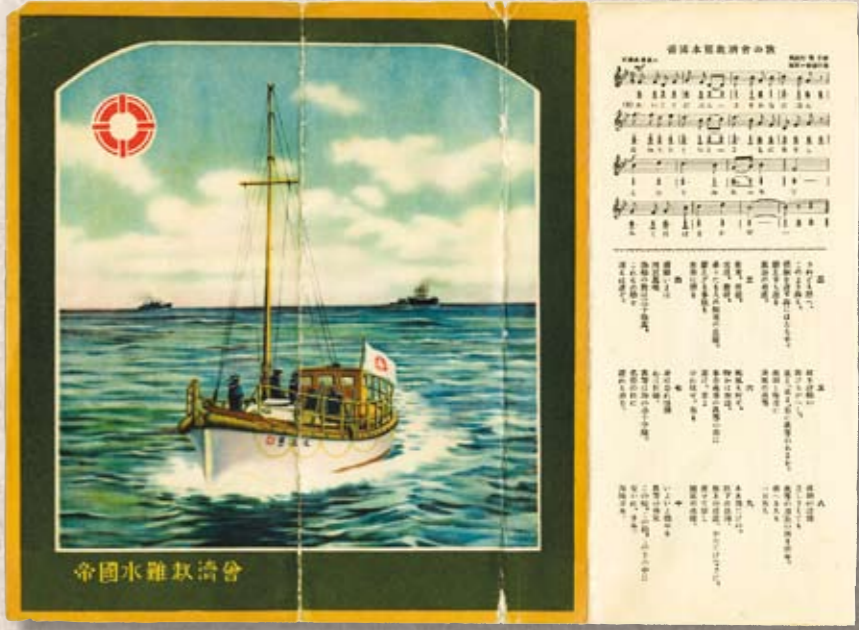
明治22年の創立以来、崇高なボランティア精神のもと水難救助活動を展開し、約19万名にも及ぶ人命と約3万9千隻の船舶を救助してきた(社)日本水難救済会(愛称:マリンレスキュージャパン(MRJ))。その120年の足跡をたどります。



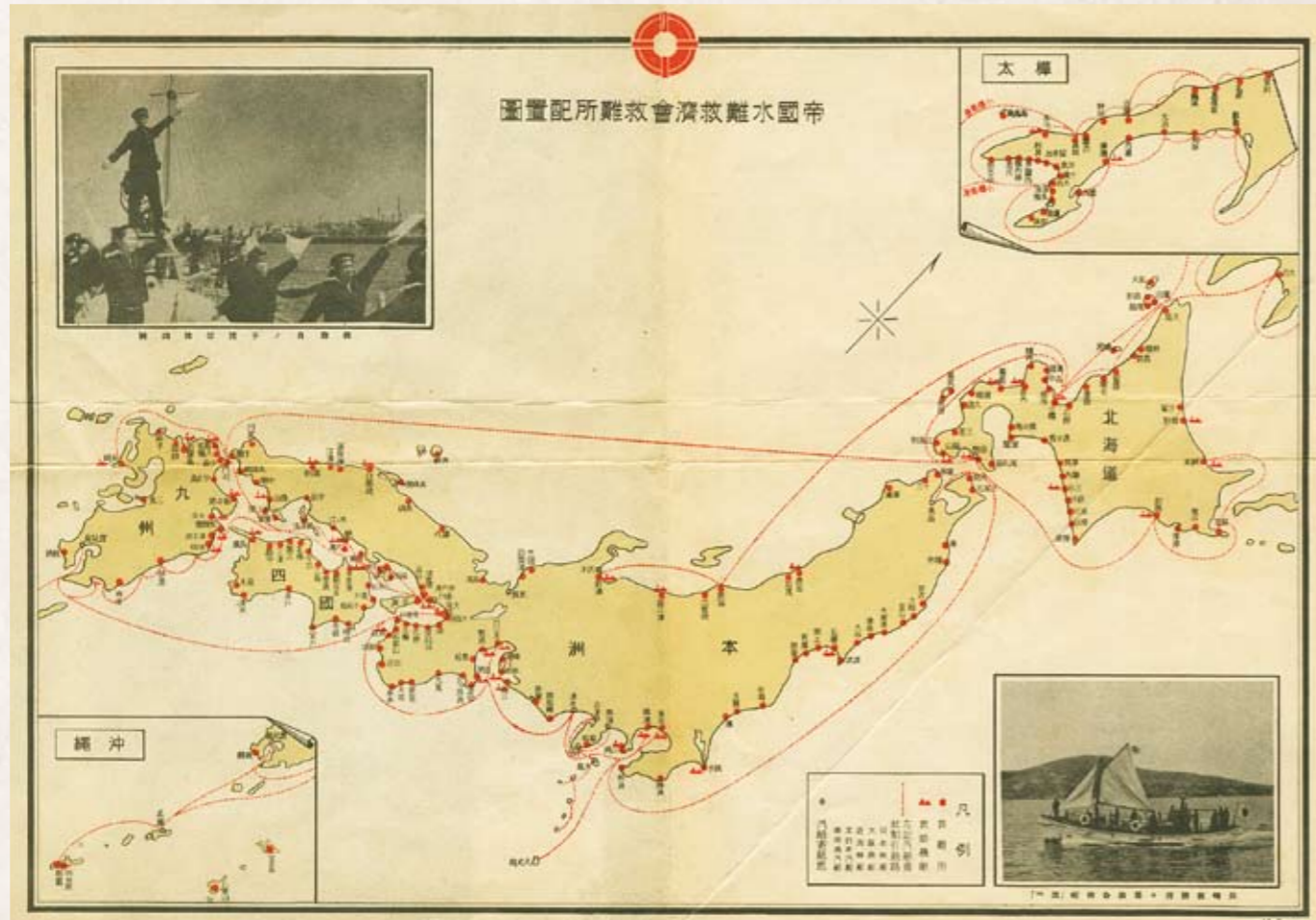
## 明治 22 年 (1889)



明治38年(1905)、日露戦争での日本海海戦で日本海軍はロシアバルチック艦隊を撃破したが、このとき2名の敵兵が水難救済会によって救助された。この行動に心を打たれた東郷平八郎提督は、水難救済会のため、黄金色の扇に「義普 八紘 愛護 四海」の書を残した。



# MRJ 120年の歩み



昭和11年当時の救難所配置図

## ■救助船の変遷



綾瀬(大正11年 東京救難所)



くすのき(昭和10年 大阪港救難所)



こうわ(昭和34年 富津救難所)



第三青波(昭和41年 大阪港救難所)

## ■創立100周年記念行事(平成元年10月)



記念式典・祝賀会



救難訓練全国大会



国際会議(アジア太平洋SARセミナー)

## ■会報の変遷



昭和12年

昭和27年10月

昭和48年1月

平成21年8月

昭和58年5月

平成10年5月

平成18年1月

平成20年8月

# 1990~2009

## 最近20年の事業の歩み

海難救助の重要性、そして“海の安全”への国民の意識が高まる中、社団法人 日本水難救済会が担う責務はさらに大きくなっています。より着実に皆様の期待に応えることを目指して、日本水難救済会は歩み続けます。

● 調査研究「海難救助におけるエイズ等の感染防止対策に関する調査研究」

● 調査研究「民間海難救助体制活性化に関する調査研究」他



● (BAN)プレジャーボート救助業務に関する業務協定締結

● 調査研究「外国民間海難救助機関の調査」

● 定款全面改正  
平成6年6月30日施行  
公益法人標準定款のスタイルを採用  
・評議員会を廃止  
・洋上救急事業を明記  
・会員種別の区分見直し  
・役員の職制を明記

● 平成6年9月  
洋上救急300件台に



● 平成7年2月28日「海の日」の制定が決定

● 救難技術研修実施

● 平成8年12月25日  
組織改編整備推進本部設置  
・理事長以下本部の部長全員で構成  
・12年度末までの間、中央法人の基礎固めと地方組織の改編整備支援を実施

● 海難救助訓練指導者研修実施

● 平成10年10月  
洋上救急400件台に



● 平成7年10月4日  
洋上救急10周年記念式典開催、78の団体・個人が表彰される



平成2年  
**1990**  
(創立101年目)

平成3年  
**1991**  
(創立102年目)

平成4年  
**1992**  
(創立103年目)

平成5年  
**1993**  
(創立104年目)

平成6年  
**1994**  
(創立105年目)

平成7年  
**1995**  
(創立106年目)

平成8年  
**1996**  
(創立107年目)

平成9年  
**1997**  
(創立108年目)

平成10年  
**1998**  
(創立109年目)

平成11年  
**1999**  
(創立110年目)

● (財)日本船舶振興会および日本海事財団の補助金交付を受け、「救難器具整備第二次緊急5ヶ年計画」を制定(初年度)



● 郵政省の補助を受け、船外機付ゴムボートを建造し、北海道支部野付救難所に配備した他、排水ポンプ10台等を整備



● 平成5年7月  
北海道南西沖地震発生、救難所員11名が犠牲に。救難救助に延べ2,500名の救難所員が活動

● 平成5年5月26日  
第101回通常総会で島居辰次郎会長が退任し、高橋寿夫氏が会長に就任



● 本会、(財)日本海事広報協会およびオリエンテーションの提携により「青い羽根クレジットカード」を海の日記念事業として発行

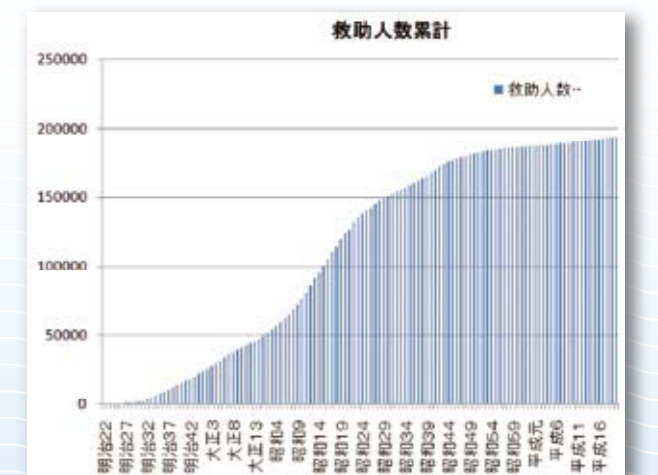
● 日本水難救済会救助出動報奨金交付規則制定(出動手当1人1件6,000円を廃止し、出動報奨金を創設。出動時間別に報奨金の額および上限人数を定めた)

● 平成9年6月12日  
各支部の地方組織としての独立化作業を開始

● 会報誌がタテ書きからヨコ書きに

● 救難技術研修実施

● 調査研究「救難所員に対する災害補償のあり方調査研究」  
● 明治22年創設以来の人命救助数190,000人突破(190,131人)



● 平成2年10月5日  
洋上救急5周年記念式典開催、表彰事業が船舶振興会の補助事業に



指導者研修 5ヶ年計画初年度



平成12年5月1日～  
緊急特番118運用開始(海上保安庁)



平成14年5月21日  
第1回名誉総裁表彰式典を開催



平成14年9月24日  
栗林貞一氏、第8代  
会長に就任



平成14年10月  
洋上救急500件台に



平成14年11月21日  
高円宮憲仁親王殿下薨去

日本財団事業「海守」に協力、  
平成16年3月2万2千人



指導者研修二次5ヶ年  
計画初年度

平成18年1月  
洋上救急600件台に



平成18年6月5日  
事務所移転。中央区新  
川1丁目から千代田区  
麹町4丁目へ



平成20年8月31日  
NPO長崎県水難救済  
会が全国で初めて「青  
い羽根募金支援自動  
販売機」を西海市役  
所に設置、この取組み  
が全国に拡大



平成20年10月1日  
互助会発足

平成21年11月  
末「青い羽根募  
金支援自動販売  
機」310台突破、  
岡山県が50台と  
設置台数トップに

平成12年 <b>2000</b> (創立111年目)	平成13年 <b>2001</b> (創立112年目)	平成14年 <b>2002</b> (創立113年目)	平成15年 <b>2003</b> (創立114年目)	平成16年 <b>2004</b> (創立115年目)	平成17年 <b>2005</b> (創立116年目)	平成18年 <b>2006</b> (創立117年目)	平成19年 <b>2007</b> (創立118年目)	平成20年 <b>2008</b> (創立119年目)	平成21年 <b>2009</b> (創立120年目)
-----------------------------------	-----------------------------------	-----------------------------------	-----------------------------------	-----------------------------------	-----------------------------------	-----------------------------------	-----------------------------------	-----------------------------------	-----------------------------------

平成13年7月25日  
高円宮憲仁親王殿下  
名誉総裁に推戴



平成13年2月14日  
全臨海都道府県41ヶ所  
に地方組織を整備

若者の水難救済ボランティア教室開始



調査研究「海難救助ボ  
ランティア活動への支  
援のあり方」

平成15年2月19日  
高円宮憲仁親王妃久子殿下  
二代名誉総裁に推戴



平成17年6月11日  
相原力氏、第9代会長に  
就任



平成19年6月7日・8日  
IMRF(国際海難救助連盟)  
総会に坂本理事長出席



青い羽根募金アドバイザー  
に城島健司選手が就任



平成20年5月17日  
海上保安庁観閲式に際し、名誉総裁が  
巡視船「やしま」にご乗船



船上にて「青い羽根募金」に協力している海洋少年団員とともに



第8代会長  
栗林 貞一

## 高円宮様の思い出

社団法人 日本水難救済会が、その前身、大日本帝国水難救済会として讃岐琴平の地で発会されて以来、平成21年11月で120周年を迎えたとのこと、誠におめでとうございます。その間一貫して全国で海の人命救助に当たってこられた多くのボランティアの方々に、心から敬意を表します。

私が会長であった時代のもっとも衝撃的な出来事は、平成14年(2002)、名誉総裁高円宮憲仁親王殿下が若くして突然薨去されたことです。宮様はすばらしいお人柄で、私たちもいろいろとご指導いただきました。宮様に深く感謝しております。当時のご著書に、『素顔の一瞬(とき)』があります。最近再び読み返してみたのですが、公務で忙しく世界を駆け巡りながら、その合間を縫って執筆されたエッセイと、ご自身で撮影された写真を収録された著書となっております。多才な宮様の一面をほうふつとし、深い感銘を受けます。ご薨去は本当に残念なことであり、いま、改めて宮様に御礼を申し上げるとともに、心よりご冥福をお祈りいたします。その後憲仁親王妃久子殿下が名誉総裁にご就任され、本会のためにご活躍いただいておりますことは、誠にうれしく、有難いことと感じております。

日本水難救済会では、全国の漁業・海事関係者など5万人を超える方々が、自発的に救難所員としてこの崇高な任務に携わっております。本会はこのような救難所員の活動を支えるため、「青い羽根募金」を行っておりますが、海洋国日本のすべての国民にこの取組みに協力していただき、応援の輪が広がってほしいと考えております。



第3代専務理事  
山本 了三

## 水救会の思い出

社団法人 日本水難救済会が全国組織となり、創立120周年を迎えたことに深い感慨を覚えます。私が本会で専務理事を務めておりましたのは、昭和59年から平成3年までの7年間でしたが、全国組織となり救難活動の充実を図るということは夢のまた夢でした。専務理事に就任して約半年、組織拡充にあれこれと苦慮していたその時、海上安全船員教育審議会の委員を務めていらした海上保安協会理事長の船谷さんより、いま洋上救急について審議を行っているが、この仕事は水難救助会の業務にぴったりである、やってみないか、という内々の相談がありました。私は即座にこれを快諾いたしました。その年の暮れ、海上保安庁長官から会長宛に「洋上救急事業の民間における推進母体として、海上保安庁に協力してほしい」という要請がありました。この要請を受け、私は業務推進体制の整備に奔走することになりましたが、幸い、海上保安庁救難課の適切な指導と大手船会社、大きな港周辺にあった大病院等のご理解とご協力、ならびに担当部長であった須田君の献身的な努力等によって、予定通り翌年10月、洋上救急活動を開始することができました。いま、この事業が水難救助会の大きな事業の柱として立派に成果を上げていることは、誠にうれしい限りです。

次の思い出は、何といたっても本会創立100周年に遭遇したことです。この件につきましては、数年間一人で悩み続けました。100年史をどうするか、記念行事をどうするか、必要経費の捻出は。しかし、「案ずるより生むが易し」のことわざ通り、平成元年10月に記念式典を無事挙行し、次いで救難訓練全国大会、アジア太平洋SARセミナー等を開催し、翌年3月に100年史を刊行することができました。

思い出は尽きませんが、紙面の都合もあり回想はこれ位にして、次の節目となる150周年に向け、水難救済会が関係者のご努力によってますます充実・発展していくことを祈念して擲筆いたします。



第2代理事長  
土方 浩

## 組織改編を振り返って

創立120周年を迎えられ、おめでとうございます。小生がお世話になった1990年代後半は自然災害や油流出による人為災害などが多発し、各地でボランティア活動が活発に行われるとともに、地方の時代ということで地方分権の要請も強く叫ばれる時代でした。

当会は民間の海難救助組織として、海上保安庁の補完的存在として全国に展開していましたが、戦前からの官主導の支援体制が否定されたため財政基盤も弱く、活動も地域差が大きく、全体的に停滞気味でありました。日本財団等の交付団体から助成補助を受け懸命に再建を図りましたが、財政状況の脆弱性は解消されず、根本的に組織の改革を行わなければ到底全国組織として社会的要請に応えられないという危機感のもと、組織改編作業に取りかかるものとなったわけです。

すなわち、従来地方を中央の出先組織としてこの活動に賛助する企業・団体等を会員とする社団法人であったものを、地方組織はそれぞれその地域のニーズに応じて活動する独立団体、中央はこれらの地方団体を支援する連合会組織とする、役割分担化を図りました。

具体的には中央は地方団体を会員とし、報奨・補償・訓練等の共通項と沖合における医療援助等を担務し、地方団体の活動を支援し名実ともに全国組織として社会的要請に応える体制としたものです。

今日、全国的に救助拠点・救難所員とも当時の数倍の規模となり、財政的にも健全な発展を遂げている状況を見て、改編作業が社会的使命にかなったものであったとの感慨を覚え、当時ご指導を賜った高橋寿夫会長はじめ本部・支部の役職員に感謝を申し上げます。





第3代理事長  
**武井 立一**

## 宮様と青い羽根

平成11年に理事長に就任した当時は、前任の土方理事長が各県の水難救済会を独立させるという大改革を成し遂げられた直後だったため、これらの各組織の運営をいかに軌道に乗せていくかが喫緊の課題でした。

そこで、「青い羽根募金」に着目して高橋会長や海上保安庁と相談のうえ、募金の在り方や手法などを検討する運営委員会を当会に設けたのですが、その有識者委員の一人として日本海事新聞社社長の大山高明氏が選任されました。

同氏から、当会は戦前は初代の有栖川宮威仁親王殿下以来、歴代皇族を総裁にして推戴してきた由緒ある団体のため、この際改めて宮様を名誉総裁に推戴すれば会の活性化につながるのでは、という貴重な提言をいただき、海へのご関心が深い高円宮憲仁親王殿下にお願いすることとなりました。

そのため同氏には大変なご尽力をいただいて、その夢が平成13年7月に花開いたのですが、明るる年11月、宮様が御年47歳で突然ご薨去されたのは誠にいたわしい限りでした。

お悲しみの御渦中にある久子妃殿下に宮様のご後継名誉総裁を順序を経てお願い申し上げたところ、ご快諾いただけた際はまさに天にも昇る心地だったものです。

宮様は、そのお衿に当会の象徴ともいえる青い羽根をおつけいただいた最初の皇族です。引き続いて現名誉総裁が青い羽根をおつけになられて名誉総裁表彰式典等にご光臨を賜っていることは、全国5万余の有志救難所員の誇りでもあり、その力の源泉ともいえると考えております。



第5代理事長  
**横山 鐵男**

## 事務所の移転

貴会の設立120周年を心からお慶び申し上げます。私は、平成17年6月から1年間理事長として在籍いたしましたが、この間、事業は日本財団等のご支援により平穩に推移しておりました。このような中で、平成18年2月、事務所を3月末までに移転してほしいとの驚きの要求を受けました。難題ではありましたが、大家さんのご都合でビルが売却されるなどの事情から至急に対応せざるを得ないこととなりました。幸い、日本海事財団から海事センタービルへの入居等について好意的なお話をいただき、相原会長にもご相談して入居させていただくこととなりました。しかし、数百万円を要する移転費用などの工面や移転時期を5月の総会後に延期するなどの課題もありました。総務部長はじめ関係職員のご尽力により、移転費用等はビル購入者が補償し、移転時期も6月にするとの交渉に成功して一安心した次第です。この後、事務所移転に係る定款等の変更は総会の承認が得られ、新事務所の間取りなどは当時の坂本顧問(現理事長)の采配で準備が進められました。

私は事務所の移転前に辞任いたしましたが、会長はじめ関係の皆様には大変なお世話になりましたことを感謝申し上げます。貴会が120年にわたる活動をさらに充実させ、海上交通の安全確保等に一層寄与されますことを、心より祈念いたします。

## 北海道



社団法人  
北海道漁船海難防止・  
水難救済センター  
理事長

**山田 邦雄**

## この20年間における、 当センターの活動を振り返って。

現在の水難救難所は、時代の変遷とともに地域に根付いた救助組織として地方組織の充実強化を図るため、平成11年に統合し、現名称となっております。

顧みますと、統合前の平成5年7月12日に大規模な北海道南西沖地震(奥尻島)が発生し、地震と津波、そして火災などの未曾有の災害により、甚大な被害を受けました。奥尻はもちろん近隣の日本海沿岸も被害を受けましたが、桧山および後志管内の各救難所は、直ちに海上での人命救助や行方不明者の捜索救助活動を行うとともに緊急輸送業務や航路障害物の除去にも当たり、出動状況は、出動隻数延べ570隻・

出動所員数延べ2,066名という、過去に例を見ない規模となりました。

また、最近では平成19年に日高管内の庶野救難所が遊漁船の座礁について救助に向かい、強風と津浪が逆巻く荒天の中で乗客乗員12名全員を救助し、船体も排水処理を施しながら曳航してくるなどの目覚ましい活動実績を上げ、この功績により高円宮憲仁親王妃久子殿下から名誉総裁賞を授与されました。

こうした活動は、日頃の救助訓練の賜でありまして、全道大会や各地の救難所での合同訓練などを通じて救助技術の向上を図りながら、今後も尊い人命と財産を海難事故から守っていきよう努めてまいりたいと思います。

## 山形県



山形県水難救済会  
会長

**鈴木 光一**

## 尊い人命と貴重な財産を守る。 救難所の使命を、今後も果たし続けます。

新年明けましておめでとうございます。日本水難救済会におかれましては、創立120周年を迎えられ、心よりお祝い申し上げます。また、平素より当会の事業運営に対し特段のご協力とご高配をいただき、厚く御礼申し上げます。

さて、当会は明治34年に初めて加茂救難所が設立され、明治35年に鼠ヶ関、明治39年に飛島の各救難所が、その後昭和34年までに県下11救難所が整備され、現在に至っております。

当会の救助訓練活動は、山形県沿岸市町ごとの水難救助訓練を毎年行うほか、平成13年8月には100周年記念救難技術研修・救助訓練を鶴岡市(旧温海町)鼠ヶ関にて、また平成20年9月には山形県合同海難救助訓練を鶴岡市由良港にて、11救難所合同で開催し、酒田海上保安部・県・関係市町村をはじめ関係者の方々からの多大なるご協力を得て、迅速・正確で効果的な救助技術を習得するための訓練を行うとともに水難救

済思想・ボランティア精神を一般に広く周知することができたと思っております。

また、昨年度の当会の救助出動状況を顧みますと、11件中人命救済4件、船舶救済7件となり、山形県沿岸ではここ数年で最多の救助出動回数となっております。11件のうち8件が海上模様の悪くなる10月以降に発生しており、5名の尊い人命が失われております。当会の救難所員のほとんどは漁業者であり、地元救難所が中心となり行方不明者の捜索に当たったことは記憶に新しいところです。不幸にして海難事故が発生した場合には、いち早く力を発揮するのが浜に密着した救難所であり、尊い人命、貴重な財産を守ることができるのは各浜の救難所であると思っております。

最後になりましたが、日本水難救済会、また各浜の水難救済会のますますのご発展を祈念いたしまして、挨拶いたします。

## 神奈川県



特定非営利活動法人  
神奈川県水難救済会  
会長  
**牧島 功**

新たな挑戦を積極的に盛り込み、  
海の男の心意気とプライドで活動を展開します。

明けましておめでとうございます。  
政治・経済・行政多難な時代を迎え、国民の不安はますます増大しています。  
海の安全・安心のため、日夜ボランティアで努力を続けている私達にとっても、補助金等の問題で、運営は困難を極めています。  
特に神奈川の海は、その多様さから発生する事故は多岐にわたり、安全確保の質も変化しています。こうしたことから、当会はスキューバ・ダイバーのチームを発足させるなど、救難所の在り方に新しいチャレンジを展開しています。  
本年は逗子海岸において20番目の救

難所を設置することを目標に、マリナー関係者や海岸保護団体等と漁協との連携を図り、新しいスタイルの救難所の開設を目指しています。  
海上保安庁の能力に限界がある以上、私達の使命と責務はますます大きくなっていきます。今こそ海の男の心意気とプライドを高め、活動を展開していく所存です。  
日本水難救済会におかれましても、地域で活動する各救難所に適切かつ大きな支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

## 石川県



特定非営利活動法人  
能登水難救済会  
会長  
**武元 文平**

特定非営利活動法人として、これからも  
海上における大きな責務を担ってまいります。

社団法人 日本水難救済会が設立120周年を迎えられたことを、心からお慶び申し上げます。  
能登水難救済会は、平成11年3月に石川県能登地区の海洋レジャー団体が母体となって、日本水難救済会能登救難所として設立され、ボランティア救助団体として活動を開始しました。平成12年7月には、地方自治体や漁業組合等の支援を得て、地域に密着した救助組織として特定非営利活動法人能登水難救済会となり、現在も日本水難救済会の地方組織として活動しております。  
当会は、輪島市から七尾市に至るまでの海域における人命の救助活動に当

たるほか、数々の救助訓練や「若者の水難救済ボランティア教室」の開催などにより水難事故防止の啓発活動を実施しております。  
発足年から平成21年9月までの海難救助出動件数は29件あり、19名の方を救助しております。これまでに、海難救助功労表彰も受けております。  
また、海難救助の活動資金を確保するための「青い羽根募金支援自動販売機」を設置するなど、募金活動の推進も行っております。  
日本水難救済会が今後ますます発展されますことを、心より期待いたします。

## 香川県



香川県水難救済会  
会長  
**琴陵 泰裕**  
(金刀比羅宮禰宜)

金刀比羅宮の御陵威により、皆様が  
安全にご活躍されますようお祈りいたします。

香川県水難救済会にとっての平成21年は、会長・副会長(多度津町長 小國宏氏)が新任、3つの救難所が新設され、救難所員数もこれまでの約5倍、419名に増えるなど、まさしく120周年の節目の年にふさわしい飛躍の1年となりました。  
また、救難救助活動や救助訓練等で救助艇に掲揚する会旗を金刀比羅宮のカラーである黄金(うこん)色をベースに制作することを琴陵が提案し、実施。8月24日に記念すべき第1号旗が完成し、金刀比羅宮に奉納いたしました。  
奉納に当たっては、琴陵、副会長、顧問の伊藤豊彦高松海上保安部長等が参列する中、参進着座、修祓(お祓い)、

斎主一拝、祝詞奏上、玉串拝礼、金幣式(会旗に御魂入れ)、斎主一拝、直会神酒といった一連の儀式(「奉納奉告祭」)が厳かに執り行われました。現在、第1号旗は御本宮横の絵馬殿に掲げられています。  
終わりに、本年も当会をはじめ全国の水難救済会が、金刀比羅宮の御陵威(強い力)を戴くことにより「災禍を被らず、日々の業務を怠らず、身体健康で幸せでありますよう、名声はますます高まり繁栄いたしますよう」と、謹んで申し上げます。

## 鹿児島県



鹿児島県水難救済会  
会長  
**上野 新作**

今後も救難所ネットワークを広げ、  
海上の安全を守り続けます。

鹿児島県は海岸線全国第3位、島嶼が多く、海洋レジャーのメッカにもかかわらず、水難救済会が発足したのは平成12年3月で、全国47組織中、37番目でした。しかし文献を紐解くと、明治44年には枕崎市に救難所が設立されたとあります。組織としての基盤が弱かったこともあり、いつの間にか消滅した経緯がありました。しかし昭和60年10月に南九州地区洋上救急支援協議会、同センター組織を立ち上げていたこと、奄美大島を中心に8つの救難ボランティア組織が活動していたことなどにより、本県水難救済会の発足はスムーズに行うことができました。その後、十管本部様のご協力のもと、現在

40救難所まで設立を見えています。県内を完璧にカバーするには、あと2、3ヶ所の設立が必要と考えています。  
海難事故が多発傾向にある中、燃油高騰が続く世情での救難所員のご参加をありがたいことと感じております。また、洋上救急体制の整備により安心して操業ができることについて、漁業者が感謝を申し上げていることを、紙面を借りてお伝えいたします。  
昨年7月に本県漁船保険組合創立70周年記念事業として、県内漁業関係者約80名で金刀比羅宮を参拝。水難救済会発足の地を訪れ、120年の歴史に感謝を申し上げますとともに、無事故祈願をいたしました。

- 01 名誉総裁 年頭挨拶
- 02 社団法人 日本水難救済会 会長 年頭挨拶
- 03 海上保安庁 長官 年頭挨拶
- 04 社団法人 日本水難救済会 理事長 年頭挨拶
- 05 特集 海を愛し、海の安全を守る奉仕の精神

## MRJ 120年の歩み

- 09 最近20年の事業の歩み
- 13 創立120周年に寄せて
- 16 全国の水難救済会からの寄稿
- 20 マリンレスキュー紀行

## 海の安全にかける男たちの群像

NPO長崎県水難救済会 稲佐救難所／三重救難所

- 30 全国地方救難所のお膝元訪問  
ニッポン港グルメ食遊記【長崎県長崎市／長崎市新三重漁業協同組合活魚センター】
- 31 「青い羽根募金 2009」活動レポート  
平成21年度「青い羽根募金」の状況／青い羽根募金支援自動販売機の設置状況

- 35 MRJ 歴史探訪シリーズ 第2回  
金刀比羅宮所蔵の「海難絵馬」

- 37 水難救済思想の普及活動レポート

- 39 レスキューの最前線  
マリンレスキュー MONO ギャラリー

- 41 レスキューステーション NEWS  
救難所だより 新設救難所の紹介／海難救助訓練

- 45 レスキューレポート 水難救助活動報告 海難救助／洋上救急

- 51 よくあるご質問

- 53 MRJ 互助会通信

- 56 MRJ フォーラム

表紙：NPO 長崎県水難救済会 稲佐救難所所長の福田一幹さん

マリンレスキュー紀行

# 海の安全にかける 男たちの群像

NPO長崎県水難救済会  
稲佐救難所／三重救難所



長崎の海原を勇壮に駆ける、稲佐救難所の救助船「旭龍」。

## 「海にいる者は、みな仲間」 年間海難救助件数7年連続第1位を誇る 長崎の海の男たちの、熱き思いに触れる。

取材協力：NPO長崎県水難救済会、長崎市新三重漁業協同組合

### 「海の県」で海上の安全を守る のは、4,896人の「海の男」

九州西端部に位置する長崎県。三方を海に囲まれ、海岸線の長さは全国2位の約4,200kmに及び、まさに「海の県」。全域に82の港湾が点在する、全国有数の港湾県でもある。気候は温暖で、漁業や観光も盛ん。海は暮らしやレジャーのステージとして、多くの人々にとって身近な存在となっている。こうした事情から漁船とともにプレジャーボートも多く、県内で確認できるその数は約12,000隻ともされる。

この長崎県において、海上の安全を力強くサポートしているのがNPO長崎県水難救済会だ。会は、昭和10年7月に社団法人 日本水難救済会 長崎県支部として設置されたものの、戦中戦後の混乱もあり、休眠状態と

なっていた。しかし、平成4年6月に長崎県支部が長崎市内に新たに設置され、活動を再開。その後、平成11年にはNPO長崎県水難救済会として組織変更がなされた。現在では、66ヶ所の救難所と50ヶ所の支所、そして4,896人のボランティア救難所員を擁する。その活躍は目覚ましく、中でも稲佐救難所は平成15年以降、7年連続で年間海難救助件数全国第1位として表彰を受けている。今回は、この稲佐救難所、そして三重救難所で海難救助に当たる皆さんにお話を伺った。



### ■長崎県水難救済会の活動実績

(出所：NPO長崎県水難救済会)

	平成15年	平成16年	平成17年	平成18年	平成19年	平成20年
出動回数(回)	56	58	52	51	43	56
出動した船(隻)	159	174	125	258	186	286
出動した人(人)	554	574	423	612	1,035	881
救助した船(隻)	38	43	39	34	28	39
救助した人(人)	96	77	74	70	60	73

# 稲佐 救難所



稲佐救難所 救難所員の皆さん。背後に浮かぶ船が救助船「旭龍」。

## 一番の困難は現場の特定。 「経験」が迅速な救助活動を実現する

「漁船に乗っていようとプレジャーボートに乗っていようと、海にいればみんな仲間。その仲間が困っていたら自分たちで助ける、その精神がすべての基本になっています」と、張りのある口調で話して下さるのは福田一幹さん。稲佐救難所の所長を務める福田さんは穏やかな外見に似合わず、平成10年と平成19年に救助出動回数功労章を受けた「海の猛者」。その出動回数は260回以上に及ぶという。

この日集まって下さった稲佐救難所の救難所員は4名。漁業や建築業など、皆さん、日頃は本業を持って

いるが、ひとたび「海難救助要請」を受ければ即座に現場へ駆けつける。「とは言え、みんなが集まるのを待っていると時間がかかりますから、船を出した者が港でみんなを拾っていくんです」と福田さん。「1分1秒を争いますから、スピードが大切。必要に応じて何隻か船を出し、救難所員を拾っていきます。効率の良さには自信がありますよ」

年間海難救助件数全国第1位を誇る救難所として、救助活動に当たりどんな困難があるかを訊ねると、「なにしろ遭難者を見つけることです」と副所長の森さんが身を乗り出

した。「興奮していて、遭難者が自分の場所を正確に伝えられないんです。GPSがあっても読み取れない」福田さんの言葉に、戸村さんが深くうなずく。「慌てていて、データを読み違えるんですね。だから、言われた現場に向かっても、見つけられない。そんな時は確認から始めます」と福田さん。「船の外見や、どの港から出たか、どの方向へ進んだか、どれくらい航行したかを確認していく。魚群探知機を持っている船の場合は水深も聞きます」とのことであった。「救難所員はみんな、どれくらい航行したらどれくらい

### ■稲佐救難所の救助出動実績

(出所：NPO長崎県水難救済会)

	平成15年	平成16年	平成17年	平成18年	平成19年	平成20年
出動回数(回)	30	29	23	26	26	13



平成20年5月には、海難救助功労(団体の部)で名誉総裁より表彰を受けた。



長崎の「海の男」の誇りを集めて輝く表彰状。

の深さになる、ということが経験でわかっているわけです。水深の等深線を追えば発見できる」と森さん。「皆さんベテランですから、あまり時間をかけずに捜索します。救助のために船が港から出てから帰ってくるまでの所要時間は、大体4時間くらいでしょうか」福田さんの言葉に、自然と頭が下がる。

広い広い海原の、どことも知れぬ1点を目指して捜索し、現場を発見し、救助活動を行って帰港する。それをその程度の時間で完了してしまうのだ。長崎の海難救助は、海

のプロフェッショナルが長年積み重ねてきた、豊かな「経験」に支えられていることを実感する。

## 海の男たちの決死の活躍が、 巨大客船の転覆を防いだ

百戦錬磨に近い長崎の海の男たちにとって忘れられない事故が、平成14年10月に発生した世界最大級の豪華客船「ダイヤモンド・プリンセス」の火災だ。約113,000トン、14層に及ぶこの客船は高さ54m、全長290mという壮大な規

模。造船所がイギリスの海運会社から受注し、前年6月に起工、翌年夏の引き渡しを目標に建造を進めていた。10月1日の午後6時近く、全14層のうち5層付近から出火。小規模な爆発を繰り返しながら火は瞬く間に広がった。

長崎海上保安部から出動要請を受けて稲佐救難所の救難所員が現地に到着したのは1日の夜。船体からは白い霧状の煙が出ていたという。最初は、ボヤで済んで消火も終わったのだらうと思った、と現場の指揮に当たった福田さんが語

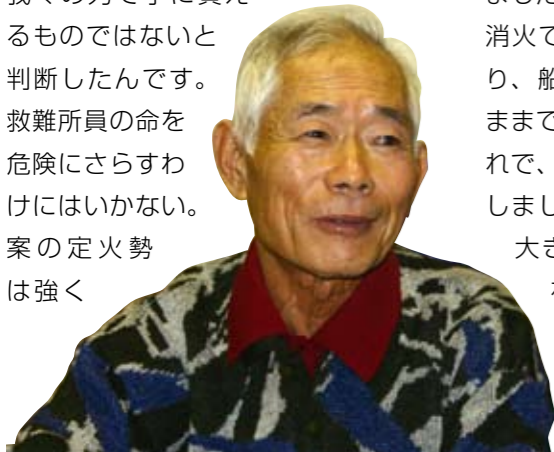


平成14年に発生した「ダイヤモンド・プリンセス」の火災。炎が船体を包んでいる。



「ダイヤモンド・プリンセス」火災現場を遠距離から撮影。いかに大規模な火災であったかがうかがえる。

る。「それでも念のため中を調べて、必要があれば消火活動をしようと、ロープと懐中電灯を持たせて私は救難所員を船の中に行かせました。消火用のホースを海中に垂らして、ロープで引き上げるつもりだったんです。ところが、船に着いてホースを引き上げたところで、船の中から煙がものすごい勢いで出てきた。私は逃げるよう指示しました、我々の力で手に負えるものではないと判断したんです。救難所員の命を危険にさらすわけにはいかない。案の定火勢は強く



当時の状況を振り返る、稲佐救難所所長の福田一幹さん。

なり、消防車と消防艇が中心となって消火活動を行う様子を私たちは見守っていました」

記録写真を指し示しながら福田さんが当時を振り返る。真っ赤な炎が大きな船体を包む光景は、写真で見ても肌が栗立つほど恐ろしい。当時の状況を口々に説明して下さる皆さんの言葉にも力が入る。「消火活動は翌日の昼過ぎまでかかりました。そして再び我々の出番。消火で使った水が船内に溜まり、船が傾いたんです。そのままでは転覆する可能性もある。それで、水をくみ出すのを我々が担当しました」と森さん。なにしろこの大きさを。どうやって、と方法を訊ねると、小型ポンプを使用した、と富上さんが説明した。

「しかし、まだ船内は危険な状況ですから、20分の交代で作業を行いました。船内



副所長の森雄介さん。時に愛船「第二秀丸」を駆って、福田さんを力強く支える。

に残っている煙を吸わないように、二重にしたタオルで鼻と口を覆うようにとも指示して」と福田さん。実は福田さんは消防団でも活動を行っており、こうした作業にも詳しい。「安全第一で作業を行って、船の転覆は免れた。造船所からはすいぶん感謝されて、表彰状をいただきました」

### 感謝されるためではない、ただ、困っている仲間のために

熱心に活動を展開する稲佐救難所の事務所の壁には、数多くの感謝状や表彰状が飾られている。「感謝されるためにやっているわけではないのですが」と、戸村さんと富上さんが



班長の戸村栄一さん。もやい銃のエキスパートとして、後進の指導にも当たっている。

照れたように笑う。自己満足でいいじゃないか、とよく言うんですよ、と福田さん。そうそう、と隣で森さんがうなずく。「今日は人を助けた、いいことをした、それでいいんだ、と皆さんとよく言っています。むかしから、海には仲間同士助け合わなければならないという精神が息づいています。互助の心、ということですね」と福田さんが続ける。「釣りに出た家族が時間になっても帰ってこない、どうしたらいいか、どこに相談したらいいか、と不安でおろおろされる方を放ってはいられませんよ」と、5歳から70年もの間、漁師として海で生きてきたという富上さん。「そんな場面に遭遇して、何かせずにはいられない、そんな動機からみんなこの活動に参加しています」富上さんの言葉は、実感を伴って深く胸にしみ



部長の富上福光さん。70年近くを船上で過ごした経験の持ち主。熟練した船の操縦技には定評がある。

てくる。「何かできることはないですか、と声をかけてくる。長崎の海で生活される方は素晴らしい人ばかりです。例えば海上で無人で航行する船を見かけたら、おかしいと連絡をくれる、みんな周りの出来事に関心があるんです。困っている人を見遇せざるかという気概があるのが、長崎の海の男の特長ですね」



海上で稲佐救難所の活動の主力となる、救助船「龍旭」。



インタビューの傍ら、森さんが手入れをしていた愛船「第二秀丸」

### 冷静かつ信頼できる 次代の指揮者を育て、 未来の海の安全を守る

さまざまなトラブルが起こる海難救助には、豊かな知識と経験が不可欠だ。それは誰であっても、一朝一夕に身につくものではない。そこで、長崎の海の未来を担う次世代の

育成について、どのような取組みを行っているのか伺った。若手の育成も行っているが、船を持っていてある程度時間の融通が利く人材を見つけて、水難救済会に参加しませんかと勧誘もしている、と福田さん。

「一番大切なのは、指揮者を育てることです。どんな状況でもパニックを起こさず冷静に対処でき、指示

を受ける者に“この人の言うことなら間違いなし”と思わせる人材。こういった活動は、指揮者によってスピードや成果が変わってきます。人命に関わる場合もあるし、誰も彼もができる役目ではない。そういった人材をこれから着実に育て、我々のノウハウを継承して欲しいと思います」もやい銃のエキスパートでもある戸村さんが、「なんでも経験です」とうなずく。救助訓練では実演より指導に力を入れているそうだ。「目的のポイントにきっちりロープを渡すのがもやい銃の目的ですが、なかなかうまくいかない。風があれば弾道が狂うし、船だって動いている。そういう難しさを実際に体験してもらうことが大切だと思います」

この方々なら、使命に燃える次世代の人材を厳しく、しかし暖かく育てて、きっと海のプロフェッショナルへと導いてくれることだろう、と思う。



取材当日の長崎港。その静けさは、いま海が平和であることの証でもある。



取材に応じて下さった、三重救難所 救難所員の皆さん。

### 最大の海難救助法は「防止」。 自己救命策周知の 必要性を実感

稲佐救難所から車で30分ほど走ったところに、次なる取材地、三重救難所がある。迎えて下さったのは4名の救難所員。所長の水江さん、副所長の戸田さん、そして所員の本川さんと羽柴さんだ。

三重救難所の皆さんが活躍のフィールドとするのは、主に五島灘近辺。地形上、先の稲佐救難所の方々と協力して救助活動に当たることも多いという。

ここで話題となったのは、自己救命策を周知することの重要性だ。実は、三重救難所はそれを象徴する海難事故に昨年立ち会っていた。

釣りに出かけたプレジャーボートが帰ってこないと家族から連絡があり、長崎県水難救済会から出動要請を受けた三重救難所の副所長、戸田さんが出動したのは真夜中のこと。先に捜索活動に当たっていた救難所員と交代し捜索を行ったが船の所在さえ確認できず、捜索は困難を極めた。結局、船と乗員1名の遺体は別々の場所で発見された。船が転覆していなかったことから、乗員は何らかの原因で海中に落ちたと推察された。

「救命胴衣を着けていれば、その方は助かったかもしれないですよ」と微かに無念さを感じられる表情で戸田さんは語る。「安全パトロールや講習会などで、着用しようと呼びかけを行っ

てはいるのですが。そもそも、救命胴衣を積んでおかないと船舶検査に通らない。だからみんな、持ってはいるんです」と所

長の水江さんは苦笑い。着けない理由は面倒だからか、と訊ねると、「それ



三重救難所所長の水江健一さん。勤務先を定年退職後、釣り好きが高じて「海の男」へ。



船がずらりと停泊する港。広々とした海原に心が洗われる。

もあるでしょうが、長崎は気候が温暖ですから、特に夏は暑くて着用が敬遠されます。それに、自分は泳ぎがうまいと過信している方もいる。それが危ない。海に落ちた時、どうして命を落とすのかのメカニズムが理解されていないんです」と水江さん。

海に落ちたら、服を身に着けたまま慌てずじっとしていることが何よりも大切だという。海水と人間の

体温には温度差があるが、じっとしていると、次第に身体の



穏やかな物腰が印象に残る本川義和さん。人柄を見込まれ水難救済会への参加を勧められる。

海水が温まってくる。動くとその海水が逃げてしまい、冷たい海水に体温を奪われて身体が冷える。体温の低下を防ごうと身体はどんどんエネルギーを放出する。その結果体力を消耗し、命を落とすことになるという。また、救命胴衣には、別の効用もある。それは万が一漂流者が海上で亡くなってしまった場合には、遺体の発見に役立つということだ。救命胴衣を着用していないと、死亡した場合、遺体は一旦海中に沈んでから浮き上がる。この時発見できないと、遺体は再び海中に沈み、その捜索は容易ではなくなる。場合によっては遺体のないまま葬儀を出すことになり、ただでさえ悲嘆に暮れる遺族の悲しみをより深めてしまう。

「ただ救命胴衣を着けるとか、服を着たままじっとしているとと言っても、どうしてそうしなければならないのか理由を理解していただかないと、なかなか実行に結びつかない。その点まで踏み込ん



副所長の戸田恵さんは、長崎県水難救済会の事務局長も兼任。

で自己救命策の周知を図ることが大切だと思います」戸田さんがしみじみとした口調で語った。

### 自船の対応力を把握。優先すべきは「自分が安全に戻る」こと

「私は三重救難所に所属して3年ほど。皆さんの中では、活動歴は浅い方です。釣りが趣味で、自分の船で出かけることがよくありましたが、水難救済活動に参加するようになって、何より自分の安全に気を配



羽柴悟さんは現在会社員。夜と休日に海の平和を守っている。

るようになりました」本川さんの言葉に、隣の羽柴さんもうなずく。「私は本川さんの翌年に参加しました。私も船を持っていますが小型なので、海が怖いと感じることはしょっちゅうです」

自分の船の対応力を把握しておくことが大切なんですよ、と戸田さん。「救助活動はもちろん大切ですが、まず自分が安全に戻ってくるのが最優先。こちらも救難所員の皆さんがどんな船を持っているのかは把握しておりますから、状況に合わせて出動を要請しています」と戸田さんは続けた。「連絡を受けたら、いつでも出られるよう

な体制を取っているんですよ」と本川さんは照れくさそうに微笑んだ。長い海岸線を有する長崎県において、大きな役割を担う長崎県水難救済会。所属する救難所員の一人ひとりが、本川さんのような心意気で活動に当たっているのだろう。長崎の「海の男」が仲間を思う気持ちは、彼らが生きる海のように広く、そして熱い。



戸田さんご自身も、海上保安庁から「海上安全指導員」に指名されている。写真は戸田さん所有の安全パトロール旗。



戸田さんの愛船「第7海彦」は、海上保安庁からパトロール船の指定を受けている。

写真で見る  
「長崎県水難救済会」

救助訓練や「青い羽根募金」、PR など、活発な活動を展開する NPO 長崎県水難救済会。その活動の様子を、写真とともにご紹介します。



救助船「旭龍」船上にて。海難救助訓練に参加した救難所員の皆さん。



放水による火災船救助訓練。次代を担う若年層も参加。



「青い羽根募金」活動風景。海の県だけあり、地域の皆さんの関心は高い。



福江港で開催されたイベントにブース出展し、「青い羽根募金」とともに活動のPRを実施。



青い羽根募金支援自動販売機の設置除幕式。自販機の設置は、長崎県水難救済会から全国へ広まった。

全国  
地方救難所  
のお膝元訪問

# ニッポン 港グルメ食遊記

日本全国をカバーする救難所の多くは港に臨んでいます。そこにしかない「海の美味」を求めて…。

今回は、長崎県水難救済会 三重救難所のほど近くにある新三重漁業協同組合の「活魚センター」を訪ねました。

五島灘が育んだ黄金のアジ

## ごんあじ

長崎の五島灘に生息する瀬付き(内湾や沿岸に定着する)のマアジで、250g以上のサイズのもの「ごんあじ」。黄金(おうごん)に輝く美しい魚体と、五(ご)島灘に生息することが名の由来です。

サイズに規定があるだけあり、魚体は「これがアジ!？」と驚くほどの大きさ。アジは一般的に脂肪分が少ないとされますが、ごんあじは格段に脂の乗りがよく、身がしまっていることが特長。これは、「活かし込み」という、独自の水産技術によるものです。

「ごんあじはどんな風に食べても旨ですが、私のおススメは漬け丼。炊きたてのご飯に新鮮な切り身をたっぷり乗せて、ごんあじそのものの美味しさを楽しんでいただきたい」と松下販売課長。おススメ通り、獲れたてのごんあじの切り身を口に運ぶと……こりこりとした身を噛み締めるたび、じわりと旨みが口の中に広がって、素晴らしい!!

長崎の新たな名産「ごんあじ」は新三重漁業協同組合に発送をオーダーできるほか、東京などにも出荷されているとのこと。皆さんも、ぜひご賞味を!

ごんあじの魅力を熱く語って下さった、長崎市新三重漁業協同組合の松下秀美販売課長。



長崎の新たな特産品「ごんあじ」。黄金に輝く魚体が美しい。



海上の生簀で「活かし込み」されたごんあじが活魚センター運ばれてくる。



こちらにも自慢、見事な伊勢エビ。活きがよく、ぎちぎちと動いている。



活魚センター外観。毎月第1日曜日の7時~10時には「大漁朝市」が開催され、旬の魚介類や加工品が勢揃い。「市価より安い!」と大評判。

### ごんあじメニュー

漬け丼



塩釜焼き



シンプルお刺身サラダ



ペッパーロール



[長崎市新三重漁業協同組合] (お問い合わせ) TEL: 095-850-1587 (オフィシャルサイト) <http://www.jf-shinmie.or.jp>





# 全国 54,000 人のボランティア活動を支えます 「青い羽根募金 2009」活動レポート

効率的かつ安全な海難救助活動を行うためには、常日頃から組織的な訓練を行うとともに、救命胴衣やロープなどの救難資器材の整備や救助船の燃料等も必要となります。これらに必要な資金は全国的な募金活動によって集められています。

平成21年10月17日清水港で行われた、沼津海洋少年団の皆さんの募金活動の様子

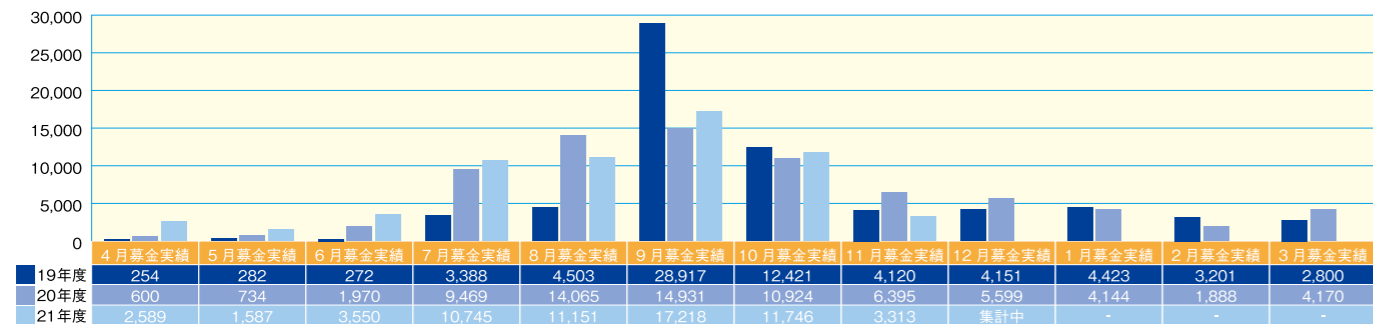
## 平成21年度「青い羽根募金」の状況

本年度も「海の日」を中心に7～8月の2ヶ月間を「青い羽根募金強調期間」と銘打ち、全国都道府県水難救済会と協力して積極的に募金活動を実施。全国の多くの皆様から、青い羽根募金の趣旨にご賛同をいただき、暖かいご支援をいただいています。

海上保安庁、防衛省等関係省庁をはじめ都道府県、企業、団体等からもご支援をいただきました。特に防衛省関係では、全国の陸上、海上および航空自衛隊の隊員の皆様や、海洋少年団および学校生徒会の皆様に募金活動へのご協力をいただきました。

皆様のご支援により11月(4月から11月末の集計)までに、61,902,998円の募金をいただきました(下図・青い羽根募金実績参照)。今年度11月末現在の募金額は、平成20年度実績をすでに上回っています。

■青い羽根募金実績 単位：千円



## 「青い羽根募金」にご協力いただき、ありがとうございました。



千代田区海洋少年団の皆さん

平成21年7月20日、千代田区神田神保町の交差点において、団員17名・指導者12名の計29名で「青い羽根募金」活動を実施。用意していた「青い羽根」はすべて無くなりました。



NPO長崎県水難救済会の皆さん

平成21年7月19日でじま体験航海「海上さるく」会場で「青い羽根募金」活動を実施しました。



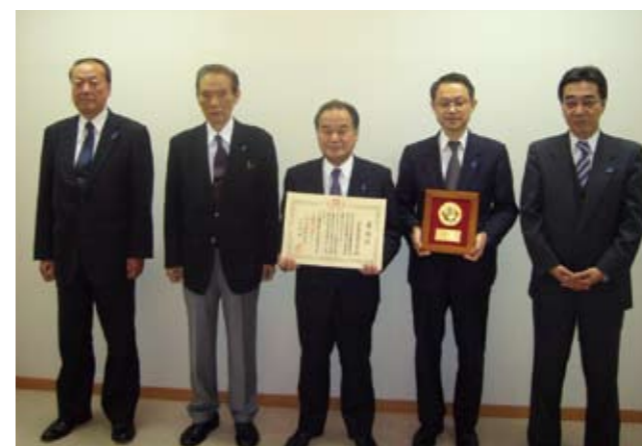
東京南ロータリークラブ様(所在：東京都千代田区)

平成21年10月15日、丸の内東京會館において、社会奉仕活動の一環として東京南ロータリークラブから「青い羽根募金」に多額の寄付があり、日本水難救済会 坂本理事長より、日本水難救済会会長感謝状と事業功労有功盾を贈呈しました。



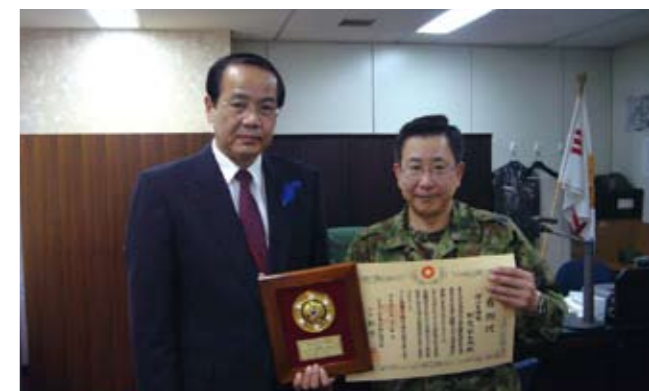
航空自衛隊 築城基地様

平成21年12月4日、航空自衛隊築城基地において、築城基地司令丸茂吉成様に福岡県水難救済会 井手善来会長より、日本水難救済会会長感謝状と事業功労有功盾を贈呈しました。



若築建設(株)様(所在：東京都目黒区)

平成21年11月20日、「青い羽根募金」に多大なご協力をいただいている若築建設(株)本社において、同社代表取締役専務執行役員菅野幸裕様へ日本水難救済会 坂本理事長より、日本水難救済会会長感謝状と事業功労有功盾を贈呈しました。



陸上自衛隊 朝霞駐屯地様

平成21年11月26日、陸上自衛隊朝霞駐屯地において、同駐屯地業務隊長 吉村卓久様へ日本水難救済会 上岡常務理事より、日本水難救済会会長感謝状と事業功労有功盾を贈呈しました。



三菱自動車(株)水島製作所様(所在：岡山県倉敷市)

「青い羽根募金」の趣旨にご賛同をいただき、水島製作所構内に水島海上保安部第1号となる支援型自動販売機を設置、その売上の一部を支援金として、岡山県水難救済会へ多額の募金をいただきました。

平成21年9月28日、同製作所において加藤英治所長に対し、岡山県水難救済会特別会員 伊藤香織倉敷市長より日本水難救済会会長感謝状を贈呈しました。



東洋建設(株)様(所在：東京都江東区)

毎年7～8月の「青い羽根募金強調運動期間」において、本年も本社および全国の各支店営業所、各事業所および系列会社の社員の皆様から青い羽根募金の趣旨にご賛同をいただき、高額な募金をいただきました。

平成21年12月2日、東洋建設(株)本社において、同社社長赤井憲彦様へ日本水難救済会 坂本理事長より、日本水難救済会会長感謝状を贈呈しました。

## 青い羽根募金支援自動販売機の設置状況

取組み2年目にして、設置台数350台突破を見込んでいます。

昨年から全国的に「青い羽根募金支援自動販売機」設置を推進していますが、11月末日現在、全国に320台が設置されております。平成21年度の目標台数250台を超え、設置計画等を入れますと年度末には350台の大台に乗りそうな見込みとなっております。



岡山県水難救済会50号機を設置(小串漁業協同組合救難所)



### 和歌山県水難救済会

平成21年11月25日、和歌山海上保安部、コカ・コーラウエスト(株)および(有)ペイサイド和歌浦(社長: 藪慶次郎)のご協力をいただき、和歌山県水難救済会第1号機の設置序幕式を実施しました。

除幕式終了後、救命胴衣着用推進員が、第1号購入者として支援自販機から飲料を購入しました。



### 富山県水難救済会

伏木海上保安部、氷見漁業協同組合のご協力をいただき、水産センター(氷見市)に前において、平成21年6月29日、関係者出席のもとに県内初となる支援自動販売機第1号の設置除幕式を行いました。



### 佐賀県水難救済会

佐賀県水難救済会は、今夏の北部九州におけるマリネリジャーによる事故死が過去4年で最多の19名(第七管区海上保安本部発表)であった事実を受け、県内の危険のある水辺に救命浮環を順次設置していく「ライフリング(命の環)プロジェクト」(救命浮環設置事業)を平成21年10月9日から開始しました。

このプロジェクトの一環として、コカ・コーラウエスト(株)のご協力をいただき、「空き缶回収ボックス」の前扉を

2段に改修し、上部の空きスペースを利用して救命浮環が収納できる「救命浮環内蔵型空き缶回収ボックス」を開発しました。

第1号機が完成して唐津港東岸壁の「佐賀県水難救済会支援型自動販売機」に設置され、県内に設置されている「水難救済会支援型自販機」の回収ボックスも順次「救命浮環内蔵型空き缶回収ボックス」に交換設置されることから、事故防止に貢献することが期待されます。

## 「青い羽根募金」の周知拡大に向けてマスクを配布！

### 大分県水難救済会

平成21年11月、「青い羽根募金」活動の一環として配付用マスクを作成。これは所属救難所員のインフルエンザ感染防止も兼ねたもので、各救難所を通じ皆様に配布しました。

募金活動を広く県民に周知することに併せ、海上保安庁が推進する「自己救命策確保の三つの基本」の啓発事項も追記。地元保安部署からも機会あるごとに海事関係者および沿岸住民に配付していただいております。

### 〈参考〉作成費用

○4色刷り1枚  
40円(1,000枚以上)/38円(2,000枚以上)/  
36円(3,000枚以上)

○1色刷り1枚  
36円(1,000枚以上)/34円(2,000枚以上)/  
32円(3,000枚以上)

※文字以外のマスク印刷の場合は、別途版代費用が必要です。



作成したオリジナルマスク

ボランティア精神の源を訪ねて……②  
金刀比羅宮所蔵の「海難絵馬」

社団法人 日本水難救済会は、明治22年に大日本帝国水難救済会として創立してから120周年を迎えました。この記念すべき節目に、日本における水難救済の歴史をさまざまな角度から検証してまいります。

◆はじめに◆

金刀比羅宮所蔵の絵馬は海や船を題材としたものが多く、信仰資料として57点が重要有形民俗財に指定されています。そのうち約20点が、海難事故の様子を描いた「海難絵馬」と

呼ばれるものです。いずれも明治初期から昭和初期にかけて奉納されたもので、当時の海難事故の様子や、その特徴を知るうえで貴重な資料といえます。

写真(1) 明治2年奉納。左右に「金の御幣」



写真(2) 明治39年奉納。右上に「金の御幣」



◆「海難絵馬」について◆

「海難絵馬」の特徴を表すものとして、まず、その臨場感あふれる描写が挙げられます。「海難絵馬」は奉納者の実体験を再現したもので、荒れ狂う波に呑まれる船舶、必死の形相で一心不乱に祈り続ける遭難者など、遭難時の絶体絶命の緊迫感が伝わってきます。

また、ほぼすべての「海難絵馬」には、瑞雲に乗った「金の御幣」が描かれています。「金の御幣」は金刀比羅大神の御神霊の象徴で、上空に燦然と輝くその神々しい姿は、奉納者の、金刀比羅大神に対する畏敬と感謝の気持ちを表しています。

◆御神助の顕現◆

写真(3)は、誤って海中に転落した子どもを助ける家族と2羽のカラス天狗を描いた「海難絵馬」です。カラス天狗はこんぴらさんの“神使”といわれ、舟の両脇から家族の手助けをしています。そして上空には子どもの身を案じるかのように、やさしい光を発する「金の御幣」が描かれています。海上で遭難した時に“こんぴらさん”に祈れば必ず助かるという言い伝えがありますが、この絵馬は御神助の“顕現”が具体的に描かれた珍しい「海難絵馬」です。

◆異色の「海難絵馬」◆

「海難絵馬」の多くは海難当事者、もしくはその近親者が命を助けて戴いた御礼に奉納されたものです。しかし写真(4)は奉納者が救助船の船長という異色の「海難絵馬」です。絵馬の銘文には、“明治42年、横浜へ向けて航行中、高知県の足摺岬沖で遭難船を発見。遭難船の曳航を試みるが、大荒れのため断念。船員の救助にあたった”と記されています。

悪天候にもかかわらず遭難者を救

写真(3) カラス天狗が飛来する珍しい「海難絵馬」



写真(4) 明治42年奉納。「海難絵馬」ならぬ「救助絵馬」



助できたこと、そして自らも無事であったことに、奉納者はこんぴらさんの“御加護”を確信されたのでしょう。水難救済精神の萌芽を感じます。

◆おわりに◆

以上、当宮所蔵の「海難絵馬」について紹介させていただきました。

「海難絵馬」には、奉納者の金刀比羅大神への真摯な祈りが込められて

おります。

◆執筆者◆



金刀比羅宮 禰宜  
琴陵 泰裕氏

# ボランティアスピリット継承のために 水難救済思想の普及活動レポート

日本水難救済会では、海事思想や水難救済会ボランティア思想を啓蒙することにより、将来の後継者になってもらえるよう、海上保安官やライフセーバーの方々を講師に招き、青少年を対象とした水難救済ボランティア教室を全国で展開しています。



(社)琉球水難救済会

## 平成21年度 若者の水難救済 ボランティア教室

「若者の水難救済ボランティア教室」は平成13年度から始まった事業で、小中学生や高校生等の若者に海の知識を深めてもらうとともに海に親しむ機会を与え、実地体験を通して救命技術を習得してもらうことを目的としています。さらに、海での安全意識の向上を図るとともに水難救済ボランティア思想を啓蒙しています。今年度も国土交通省・海上保安庁・消防庁から後援を受け、各地で開催された模様を紹介します。



### ■NPO能登水難救済会

平成21年7月26日、七尾市下佐々波漁港にて、市立湊南中学校の生徒32名を含む146名参加のもと、教室を開催しました。昨年も実施したところ評価が高く、今年は学校の方から教室開催の依頼がありました。学校に統合の話もあるため、思い出として生徒たちの記憶に残るようにと身近な海を会場にした運動会が行われ、運動会のプログラムの中にボランティア教室が盛り込まれたものです。ペットボトルを利用した救助法や、救命胴衣・救命浮輪の使用法などを指導しました。



### ■愛媛県水難救済会

平成21年6～7月にかけて、ブルーエンジェル救難所および来島救難所、新居浜マリーナ救難所、津島救難所、中泊救難所が、地域の小中学校や自治会、関係保安部等の協力を得て、県内8ヶ所で教室を開催。小中学校生徒と教職員、保護者が参加しました。また、中島・新居浜・正岡の各小学校にそれぞれレスキューチューブ1本、北灘小学校には救命胴衣2着と救命浮輪1個を寄贈しました。



### ■佐賀県水難救済会

平成21年7月15日、唐津市立呼子小学校のプールにて教室を開催。全児童240名と教職員10名、保護者と市教育委員会関係者等50名が参加しました。“命を守る”着衣泳の方法や自己救命策について学んだ子どもたちは、真剣に着衣泳の基本となる背浮きに取り組み、見学していた保護者や教育委員会関係者からは、地域から水の事故を起こさせないという声が上がりました。



### ■(社)琉球水難救済会

琉球水難救済会では、これまで小中学校および高校生等を対象に教室を開催してきましたが、初めての試みとして、平成21年8月15日に読谷村立喜名小学校において、6年生を対象に「若者の水難救済ボランティア教室および皆泳教室」を実施しました。

喜名小学校の6学年担任教諭およびPTAが「6年生最後の思い出に残る夏休みにしたい」として教室開催を要請。これを受け、当会は第十一管区救難課およびライフセービング協会沖縄県支部の協力を得て、海での安全知識や海洋

危険生物、心肺蘇生法について指導するとともに、皆泳教室の一環としてプールで着衣泳やレスキュー体験などを行いました。講師の指導のもと、ペットボトルや救命胴衣、着衣等を活用した水中での体験、また救助活動の体験に、生徒たちも楽しみながら一生懸命に取り組んでいました。

# マリンレスキュー MONOギャラリー

「経験」がモノをいう海難救助の現場。だからこそ、資器材への知識を深めておくことが大切です。  
このコーナーでは、海上保安庁第三管区海上保安部羽田特殊救難基地が保有する、最新のプロ仕様救助グッズを紹介します。

## 全面マスク（要救助者用）

転覆船に閉じ込められた要救助者を、船内から救出するための器材です。  
転覆船内に進入した隊員が要救助者に装着します。これにより、水中での呼吸が可能になり要救助者を水中で移動させて転覆船内から搬送することができます。



**転覆船写真①**  
平成17年9月28日発生  
事案  
隊員が船底上に這い  
上がり船内に閉じ込め  
られた要救助者と連絡  
を取っている様子。



**訓練写真①**  
救助用面体装着中



**転覆船写真②**  
平成17年9月28日発生  
事案  
隊員が船内に閉じ込め  
られた要救助者1名を、  
救助用全面マスクを装着  
し救出してきた様子。



**訓練写真②**  
要救助者搬送中

## 海上保安庁特殊救難隊の装備



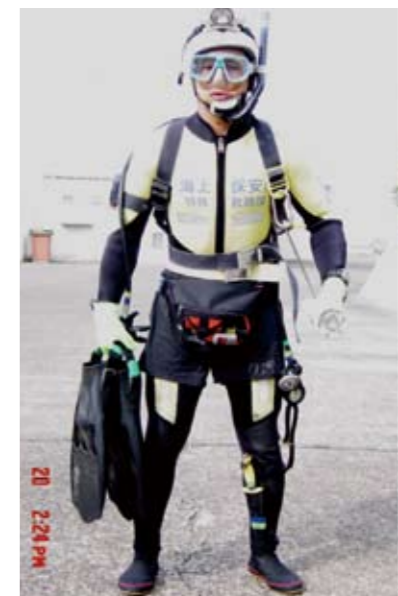
アクアコム(水中無線機)  
水中で、双方向の会話をす  
ることができます。

全面マスク  
(要救助者用)

潜水個人装備一式



**アクアリフター**  
3トンの浮力体(直径約1.5m、長さ2mの円柱形)で、  
沈下の防止措置のため転覆船等に取り付けるものです。  
潜水ポンプから圧縮空気を注入することで膨らませます。



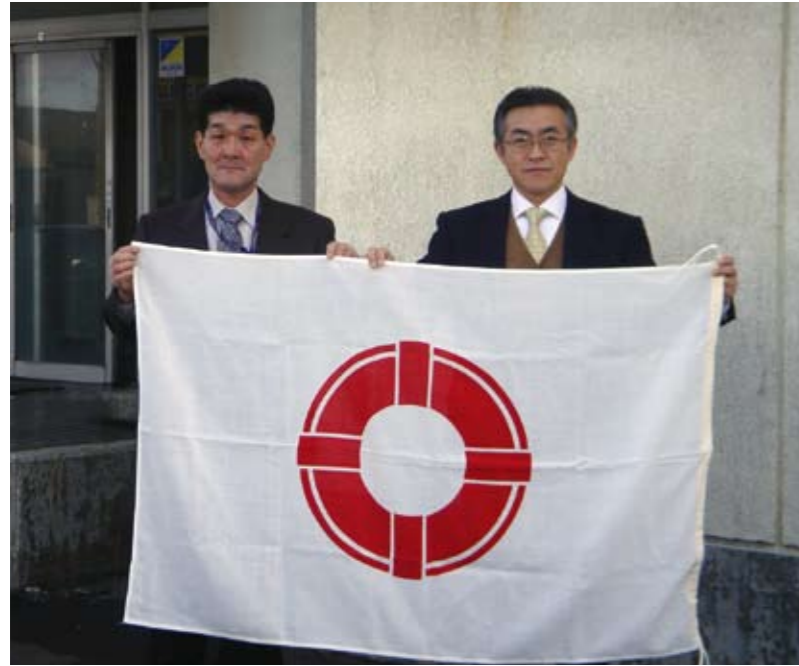
**潜水個人装備一式**  
特殊救難隊員が、潜  
水作業を実施するた  
めに装着する装備一  
式です。

## 新設救難所の紹介

海難救助活動の拠点となる新たな救難所が新設されています。

今回は青森県「野牛救難所」をご紹介します。なお、紹介文は野牛救難所からご提供いただいたものです。

## 青森県漁船海難防止・水難救済会



## 野牛救難所

平成21年9月12日設立 所長以下60名

青森県は、日本海・津軽海峡・太平洋、そして陸奥湾と四方を海に囲まれ海岸線約760kmを有しています。県内には複数の救難所が設置され、海難事故発生の際、救助活動に当たっています。

今回新設された野牛救難所は津軽海峡海域に位置し、県内13番目の救難所として平成21年9月12日に開催された漁船海難防止「東通村地区」大会において、野牛漁業協同組合へ設置されました。救難所長には三國野牛漁協組合長が任命され、決意表明として「地域の安全操業の啓発はもちろん、海難事故発生の際は迅速な救助活動を行えるよう訓練を実施し、取り組んで参ります。海難および水難事故において多くの人命の安全確保に寄与することを所員一同決意します」と述べました。

本会および関係団体が一丸となり、海難事故防止・安全操業の啓発、救命胴衣常時着用を強力に推進いたします。

## 海難救助訓練

平成21年度海難救助訓練指定数は、「救助訓練実施要領平成21年度版」で各県水難救済会別に合計で277件が指定されています。12月10日までに報告のあった訓練実施状況は、全国30の地方水難救済会において、延べ267の救難所、支所から4,085人の救難所員が参加して実地訓練を実施しました。また、新潟県水難救済会において指導者研修が行われ、10救難所から20名が参加しました。

訓練の実施要領としては、毎年配布する当該年度版の訓練実施要領のほか、「救難所員訓練必携」と「海難救助作業マニュアル」を各救難所に配布しておりますが、日本版の救急蘇生ガイドラインが変更になったことや救助資器材の型式が新しくなったことから、これに対応して2月に改訂版を作成、4月に各県水難救済会に救難所の分も含めて配布いたしました。



## 静岡地区水難救済会

平成21年7月26日、静岡県熱海市熱海港において、静岡地区ICS救難所が下田海上保安部・熱海警察署と協同で「平成21年度合同水難救助訓練」を実施。夜釣りに出た男性3名乗船のプレジャーボートが戻らず、携帯電話もつながらず、また救助艇現場到着直前に乗船者1名が海中に転落したという想定で、情報伝達・搜索救助(人命救助も含む)・航行不能船曳航救助の各訓練を行いました。参加者人員は26名(うち、16名が救難所員)、参加船艇等は6隻(うち、救難所所属のパトロール艇4隻)でした。



## 新潟県水難救済会

平成21年10月10日、新潟県村上市の新潟漁業協同組合山北支所地先岸壁および港内において、山北救難所が訓練を実施。市長・市議会・消防・海上保安部関係者など多数の関係機関より8名の来賓を迎え、参加人員64名(うち、56名が救難所員)で救命索発射・孤立者救助・行方不明者搜索・心肺蘇生などの訓練を行いました。講評として、新潟海上保安部 西方富士夫次長より救難資器材の整備状況ならびに救難所員の機敏かつ節度ある行動にお褒めの言葉をいただき、救難所員の日頃の活動の成果が評価された場となりました。



## 熊本県水難救済会

平成21年9月27日、熊本県葦北郡芦北町の葦北海岸・佐敷港海岸壁において、芦北救難所が訓練を実施。参加人員28名(全員が救難所員)で基本動作および点検、孤立者救助・乗揚船救助・浸水船救助などの訓練を行いました。乗員14名の観光漁船が岩場に乗り揚げ船底より海水侵入、

自力航行不能との想定で、ハンドタイプ索銃2丁・ゴムボート2艇・船外機船1隻・漁船1隻を使用して実地訓練し、救難所員一人ひとりの速やかな連絡および役割分担の徹底を図りました。

# 救難所だより



## (社)北海道漁船海難防止・水難救済センター

平成21年7月9日、石狩市石狩湾新港東埠頭において、平成21年度漁船海難防止・水難救済センター全道大会を実施。来賓・関係者を含め総勢760余名が参加しました。

全道の漁業関係者に海難防止を呼びかけるとともに、石狩救難所による浸水と火災を想定した総合訓練を行い、第

一管区海上保安本部の函館航空基地所属のヘリコプターによる負傷者吊り上げ訓練を展開。この他、海難防止研修による救命胴衣の着用啓蒙講演や、ゴムボート操法・救命索発射器操法・心肺蘇生法の救難技術3種についての競技などが行われました。



## 岩手県水難救済会

平成21年9月8日、岩手県上閉伊郡大槌町の大槌漁港で、大槌救難所が訓練を実施。参加人員69名(うち、37名が救難所員)で、AEDの使用も含めた心肺蘇生や漁船曳航などの訓練を行いました。釜石海上保安部所属員6名を含めた32名も参加し、有事での体制強化や救助技術向上を目指しました。



## 愛媛県水難救済会

平成21年7月27日、愛媛県宇和島市津島町の北灘北福浦漁港岸壁および全面海域で、津島救難所と中泊救難所が合同で訓練を実施。津島救難所員12名・中泊救難所員6名の参加のもと、近距離もやい銃など救難資器材取扱い・着衣泳・心肺蘇生(AEDも使用)・海上保安庁のヘリコプターも参加しての磯場孤立者吊りなどの訓練を行いました。当日は訓練場所近くに位置する宇和島市立北灘小学校の児童と教職員、保護者34名が参観。着衣泳や心肺蘇生の訓練にも参加し、自己救命策や救難所の役割について理解を深めていただきました。



## NPO長崎県水難救済会

平成21年10月24日、長崎港内で、稲佐・小菅・三重・毛井首・川原・野母崎・ヤマハマリン西九州の7救難所(合計救難所員61名)が参加する合同訓練を行いました。長崎海上保安部の協力のもと、もやい銃操法および実射・CPR実技およびAED取扱い・孤立者救助・漂流者救助・

火災船舶の消火および曳航救助などの訓練を展開。小型船救急通報システムの展示も行いました。総勢参加人数は約100名、救難所員は他団体との役割分担をして協議を重ね慎重に臨み、多岐にわたる訓練を無事終了することができました。

# 海難救助活動レポート

平成21年における海難救助出動件数は11月末現在382件で、321人の人命救助と175隻の船舶救助に関与しました。全国の統計でみると、海難救助に出動した救難所員は延べ9,011人、救助船は延べ2,703隻、協力船は延べ416隻でした。これを昨年度の同時期と比較すると、出動件数では37件増加し、救助人命は6人の増となっています。出動した救助船は846隻の増で、出動救難所員は1,375人の増となっています。

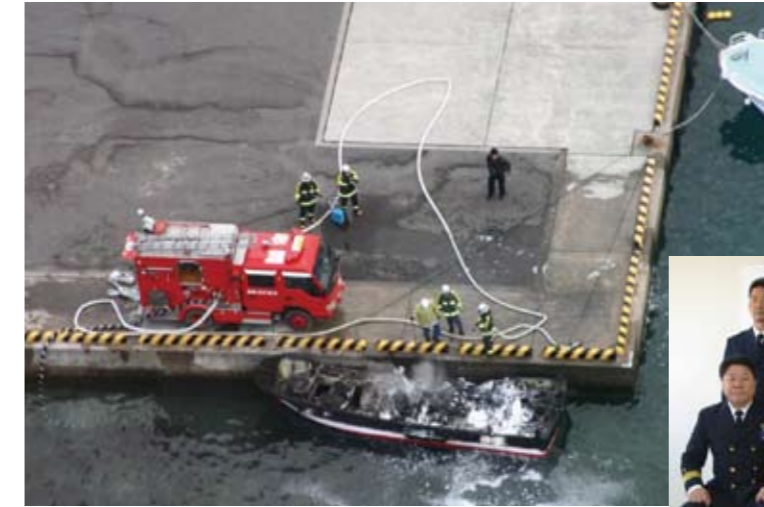
## 無人の漁船に気づき通報、救助を待っていた乗員を助ける NPO能登水難救済会珠洲救難所

平成21年9月22日午後4時頃、乗員1名の漁船A丸は漁場に向けて移動中、船体動揺によりバランスを崩し、乗員が海中に転落した。乗員が操船していないA丸は無人のまま航行を続け転落場所から遠ざかった。事故現場付近で遊漁中であった珠洲救難所員が無人のA丸に気づき別の救難所員に連絡、能登海上保安署に通報した。海上保安署から捜索救助要請を受けた救難所は直ちに救難所員を出動させ、定置網の標識槽の上で救助を待っていた乗員を無事収容した。

NPO能登水難救済会  
珠洲救難所  
林 修三さん  
米谷 賛三さん



## 火災船から海面に逃れた漂流者を助け、消火活動にも協力 宮崎県水難救済会宮崎県南部救難所



宮崎県水難救済会宮崎県南部救難所  
薬師寺 雄さん



乗員1名の漁船B丸は平成21年11月5日午前5時40分頃漁場に向けて航行中に火災状態となった。乗員は身の危険を感じて、漁業用浮体2個を手に海面に飛び込み、漂流状態となった。午前6時頃、イカ釣り漁を終えて帰港の途にあった救難所所属船漁船ゆき丸（乗員1名）は沖合に火災船を認めたことから救助に向かい、約30分後に到着。船内に人影がなかったことから付近海域を探したところ、漂流しているB丸乗員を発見、揚収救助した。また、ゆき丸は大納港内で消防本部に協力し火災船を港内まで曳航、消火活動に協力した。

## 波にさらわれた釣り人2名を救助、意識不明者1名をCPRで救命へ 和歌山県水難救済会紀南西部救難所すさみ支所



平成21年10月19日午前10時55分頃、和歌山県すさみ町江須崎付近の磯場から釣り人男性2名が波にさらわれ海中に転落、付近の釣り人より漂流しているとの通報を受け、正富丸が救助に向かった。転落者を発見し収容したが1名が意識不明のため、救難所員がCPRを実施したところ、意識の回復をみた。現場付近は局地的に大きな磯波が立つことがあり、一歩間違えば救助船が暗礁に乗り上げる危険がある中での救助活動であった。また、漂流者1名は救助直後意識がなく危険な状態だったが、救難所員の適切な処置により無事救命された。

和歌山県水難救済会紀南西部救難所  
すさみ支所  
酒井 正行さん  
酒井 宏明さん

## 長年の勘で潮目を読み、6時間漂流していた遭難者を救助 高知県水難救済会宇佐救難所

平成21年9月27日、宇佐救難所は、高知海上保安部より横浪半島近くの白鼻沖13マイル付近でプレジャーボートから乗員が海中に転落し沖に流されたとの救助依頼を受けた。出動した救難所員の船は4時間近く捜索したが発見できず、帰港しようとしたものの、救難所員が長年の経験を踏まえて潮目を読み、事故発生より約6時間後に漂流者を見つけた。漂流者は救命胴衣をつけないまま、つかまるものもなく立ち泳ぎで浮くことに専念していた。救難所員は漂流者を救助し帰港、漂流者の生命に別状はなかった。



高知県水難救済会宇佐救難所  
所長 上野 浩功さん  
副所長 柿本 啓輔さん  
救難所員 鳴滝 清一郎さん



### 宮城県水難救済会亘理救難所

平成21年7月13日午後2時40分頃、宮城海上保安部から「岩沼緑地公園前浜に漁船C丸が乗り上げている」との出動要請を受け、亘理救難所長指揮のもと用船7隻に救難所員が乗船して出動した。同時期に陸上から現場に急行した漁協職員がC丸を発見した際、自動操舵、微速前進でエンジンのかかったまま砂浜に乗り上げており、

船内に乗員の姿はなかった。操業中の転落事故も視野に入れ、救難所用船7隻で付近海上を捜索したが、乗員は発見されなかった。その後救難所員がC丸に乗り込み自力脱出を試みたところ砂浜からの離脱に成功、用船1隻に曳航されて荒浜漁港に帰港した。

### 茨城県水難救済会波崎支部救難所

平成21年7月21日午前3時10分頃、港内にて漁船D丸の乗り揚げ事故発生。漁協より連絡を受けて波崎支部救難所員77名と救助船7隻が出動し、午前5時頃現場に到着した。

乗員は自力で陸に避難していた。D丸は道流堤に乗り上げており、漁船2隻で引き出そうとしたが不可能で

あった。そのため、オイルフェンスを張り油吸着マットにて処理を行った。その後サルベージ会社に依頼し、船体を陸に引き揚げた。

### 千葉県水難救済会金田救難所

平成21年9月26日午後7時50分頃、木更津海上保安署より汽船Eが海苔養殖施設で遭難しているとの連絡が金田救難所に入り、所長は救難所員を招集。6名が救助船第18金協丸に乗船し、現場に向かった。

午後9時30分頃現場に到着したが、夜間により船体救出ができないため、汽船Eを海苔養殖施設に固定係留し

乗員9名を救出、中島漁港に帰港した。

翌27日、午前8時50分より船体の救出作業が行われ、午前9時30分に終了。推進機を点検し、航行に際して不具合がないことを確認した。

### 千葉県水難救済会房州ちくら救難所

平成21年10月14日午前4時30分頃、忽戸沖150m付近にて漁船F丸が操業中、エンジンがストップして起動なくなり、北東の風に流されて岩礁に近づいた。近くの漁船が乗組員を救助したが、F丸は間もなく岩場に乗り揚げ、横転状態となった。通報を受けた房州ちくら救難所長は所員を招集したが荒天かつ干潮時であったた

め、いったん解散。昼過ぎ、天候が回復し満潮となったことから再び所員を招集し、現場に集合。F丸にロープをかけて岩場から引き出し、そのまま近くの海岸へ引き揚げた。

### 和歌山県水難救済会和海救難所戸坂支所

平成21年10月11日午後2時40分頃、和歌山県海上保安部より、海南市戸坂沖で5人乗りのプレジャーボートの機関室内で火災が発生、航行不能となっているとの情報があり、戸坂支所長ほか4名の救助員が漁船天神丸に乗船し出動。該船と会合し、直ちに船体が焼損する恐れはないが、機関が停止して漂流しておりこのままでは

付近の岩場に乗り上げてしまうと判断、該船を曳航し近くの戸坂漁港に入港、乗員5名と船体救助を無事終了した。

### 山口県水難救済会黄波戸救難所

平成21年9月8日午前6時20分頃長門市日置上今岬海上で、操業中の漁船G丸と漁場から港に向け航行中の漁船H丸が衝突、G丸船体が破断し船首部が転覆、船尾部が沈没しG丸の船長が行方不明となった。僚船からの通報および仙崎海上保安部の要請を受け直ちに現場に急行、G丸船首部を黄波戸漁港へ曳航するとともに、事故

現場付近の海底で船尾部および船外機を発見、揚収し黄波戸漁港に搬送した。

行方不明となったG丸船長については、漁船およびダイバー等により捜索していたところ、10日15時頃現場付近の海底から遺体で発見、揚収した。

### 大分県水難救済会香々地救難所

平成21年9月5日午前7時5分頃、救難所員1名他1名が乗船した泰栄丸が豊後高田市長崎鼻海水浴場沖合に設置されていたゴミ流入防止ネットの撤去作業を行っていたところ、海上を救助を求めながら漂流する浸水沈没船I丸を発見したため直ちに急行。漂流者2名を揚収し救助した。I丸は冷却用海水が揚がらなかったことによる機関

のオーバーヒートに加え、一部水面下にある塩ビ管製排気管から海水が船尾船内に流入し、船倉内と機関室との間に設けられた壁孔から海水が機関室に侵入したことにより午前6時45分頃沈没したと推定される。

### 岡山県水難救済会日生町漁業協同組合救難所

10月21日午前6時5分頃、玉野海上保安部から、日生漁港内で漁船が燃えており、乗員が行方不明になっているため出動を願いたいとの要請を受けたため、救助船1隻に救難所員3名が乗り組み、出動した。

同じ通報を受けた消防組合の消防隊も現場に到着したが、火災船は沖合で燃えており放水消火活動が困難で

あったことから、救難所の救助船に消火ポンプ等の資器材を載せ、消防隊員とともに消火活動に当たり、鎮火させた。なお、火災船の乗員は、僚船により救助されていたことが判明した。

# 洋上救急

事業開始以来、平成21年12月末までに  
684件もの洋上救急事案に対応しています

洋上救急事業は、社会保険庁や各諸団体からの資金援助と医療機関、医師・看護師、海上保安庁や自衛隊の全面的な支援を受けつつ、昭和60年10月の事業開始以来、平成21年12月末までに684件の事案に対応してきました。これまでに傷病者712名に対し、医師852名、看護師437名が出動し、診察や治療を行っています。

平成21年8月25日14:45発生

## 5日間にわたる洋上救急で患者の命を守る

機関長が発熱、背中・脇腹の痛みを訴えた。医療機関の助言を受け、船主が洋上救急を要請。飛行機MA854に医師1名・看護師1名が同乗し松島基地を出発。その後医師等は八戸航空基地にてヘリMH564に移乗し、洋上の巡視船「つがる」に着船。医師等は「つがる」に移乗して該船に向かった。27日、飛行機LAJ500は吊り上げ支援のため羽田航空基地を出発。ヘリに機動救難士2名が同乗して「つがる」を出発し、該船より患者を吊り上げ完了、「つがる」に戻った。29日ヘリに患者と医師等が同乗し、「つがる」を出発。石巻赤十字病院ヘリポート到着後、患者を病院に引き継いだ。

【発生位置】宮城県金華山灯台の東約1300海里 北緯35度32分 東経169度35分  
【傷病者】男性・53歳 機関長（傷病名）急性腎盂腎炎  
【出動医療機関、医師等】石巻赤十字病院 医師：1名 看護師：1名  
【出動勢力】函館海上保安部 PLH つがる、ヘリ MH564 仙台航空基地飛行機 MA854 函館航空基地機動救難士2名 羽田航空基地飛行機 LAJ500



## 周囲のスタッフが安全を確保してくれる中、治療に専念

目的地となる漁船の位置が1,300マイル離れていると聞き、何日間の救急活動となるのか不安でした。連絡から1時間後に出発、航空自衛隊松島基地から海上自衛隊八戸航空基地にヘリで移動、その後巡視船「つがる」にヘリで乗船することとなりました。患者と接触するまで、巡視船の中で船酔いに耐えながらの2日間が経過。3日目22時過ぎ、機動救難士2名が漁船からヘリで患者を吊り上げ救助し巡視船に収容。接触直後の情報は「意識があるが、冷や汗をかき左胸が痛い」というものでした。船内にあるのはベッドとAED、薬品は持参の抗生剤と輸液で数も限られており、とにかくできることをやるしかない状況でした。洋上救急活動は、天候の影響を大きく受けます。医療者が患者の処置に専念できるのも、船員やパイロット、機動救難士の方々が安全確保をしてくださるおかげだと強く感じました。5日間の洋上救急活動で資材やマンパワーの限られた中で状況に合わせて柔軟な対応が求められるという経験を、当院がこのような重要な役割を担っていることを実感しました。

洋上救急に出動した看護師 大友 直美さん



平成21年9月12日09:05発生

## 腎機能が一部停止した船長を洋上で吊り上げ収容

船長が背中に痛みを訴え嘔吐。医療機関より助言を受け、運航者から洋上救急の要請。ヘリMH685が該船に向け、巡視船「しきしま」を出発。飛行機LAJ500には医師2名が同乗し、羽田航空基地を出発した。15時13分にヘリは該船から患者を吊り上げ揚収し、八丈島空港へ搬送。八丈島空港で患者をヘリから飛行機に移乗させた。飛行機は羽田航空基地に向けて出発し18時05分に羽田航空基地に到着、患者を救急車に引き継いだ。

【発生位置】東京都八丈島の南南東約280海里 北緯29度30分 東経142度02分  
【傷病者】男性・51歳船長（傷病名）腎梗塞（腎臓の一つが機能停止）  
【出動医療機関、医師等】日本医科大学付属病院 医師：2名  
【出動勢力】横浜海上保安部 PLH しきしま、ヘリ MH685 羽田航空基地飛行機 LAJ500



平成21年10月3日21:00発生

## 後頭部裂傷の患者を約6時間半で病院に収容し、救命

甲板員が操業準備中、甲板上3mの作業台の上で集魚灯を展開中に甲板上へ落下、後頭部を打ち約10cmの裂傷を負った。該船から救助要請を受け、巡視船「もとうら」が発動。事故発生から約1時間後に患者の容態が急変したことから船主（漁労長）が洋上救急を要請。海上自衛隊に災害派遣が要請された。翌4日0時過ぎにヘリUH60Jに医師1名・看護師1名が同乗し、該船に向けて八戸基地を出発。ヘリが該船から患者を吊り上げ救助し、約30分後に八戸基地に到着、患者を救急車に引き継いだ。

【発生位置】青森県鮫角灯台の東約105海里 北緯40度36分 東経143度51分  
【傷病者】男性・55歳甲板員（傷病名）脳挫傷、頭部挫傷、左肋骨3本骨折  
【出動医療機関、医師等】八戸市立市民病院 医師：1名 看護師：1名  
【出動勢力】浦河海上保安部 PM もとうら 海上自衛隊大湊基地ヘリ UH60J



平成21年10月20日00:00発生

## 2機のヘリの連携により、脳出血患者を助ける

甲板員が操業中、後頭部から背中にかけての痛みを訴えた。医療機関より助言を受け、船長から漁協を通じて洋上救急を要請。ヘリMH907に医師1名・看護師1名と潜水士2名が同乗し、仙台航空基地を出発した。巡視船「そうや」着後、ヘリMH565は潜水士2名を同乗し「そうや」を出発。該船から患者を吊り上げ救助し、「そうや」に戻る。その後、ヘリMH565に患者、医師等と潜水士が同乗し、「そうや」を出発。仙台航空基地に到着し、患者を救急車に引き継いだ。

【発生位置】宮城県金華山灯台の東南東約345海里 北緯35度27分 東経148度00分  
【傷病者】男性・27歳甲板員（傷病名）脳内出血、くも膜下出血の疑い  
【出動医療機関、医師等】仙台医療センター 医師：1名 看護師：1名  
【出動勢力】釧路海上保安部 PLH そうや、ヘリ MH565、潜水士2名（PLくりこま） 仙台航空基地ヘリ MH907、飛行機 MA854



平成21年11月8日21:30発生

## 洋上から約6時間半で患者を病院へ

コック長がオーストラリアから名古屋向け航行中、意識不明に。代理店を通し船長が洋上救急を要請。機動救難士2名が同乗したヘリMH687と、飛行機MA954が関西空港を出発した。ヘリは南紀白浜空港に着陸後、医師1名・看護師1名を同乗し該船に向け出発。該船から患者を揚収して南紀白浜空港に到着、患者を救急車に引き継いだ。

【発生位置】和歌山県潮岬灯台の南約124海里 北緯31度24.2分 東経135度31.3分  
【傷病者】男性・47歳コック長（傷病名）脳幹出血  
【出動医療機関、医師等】南和歌山医療センター 医師：1名 看護師：1名  
【出動勢力】関西空港海上保安航空基地飛行機 MA954、ヘリ MH687、機動救難士2名



## 平成21年 その他の洋上救急の状況

発生日時	発生位置	傷病者	状況
平成21年8月28日(08:00)	沖縄県北大東島の北東約78海里 北緯26度59分東経132度10分	男性・57歳 一等機関士（傷病名）脳梗塞	一等機関士が左半身の手足の痺れを訴える。医療機関の助言を受け、代理店から洋上救急の要請。潜水士2名が同乗したヘリMH961と、医師1名・看護師1名が同乗した飛行機MA72が那覇空港を出発。ヘリは該船と会合して患者を吊り上げ救助し、北大東島空港に搬送。北大東島空港で待機していた飛行機に患者を移乗させ、那覇空港に向け出発。到着後、患者を救急車に引き継いだ。
平成21年8月29日(08:00)	北海道襟裳岬の南西約250海里 北緯40度15分東経145度19分	男性・19歳甲板員（傷病名）下唇けん切創および腹部5箇所刺創	甲板員が包丁を持って海に落ち、目と腹を刺す。船長から洋上救急の要請を受け、医師1名が同乗したヘリMH565が市立釧路総合病院ヘリポートを出発、「そうや」に着船。その後ヘリは該船から患者を吊り上げ揚収し、「そうや」に収容。患者と医師が同乗したヘリは「そうや」を出発。市立釧路総合病院ヘリポートに到着後、患者を同病院に引渡した。
平成21年9月21日(10:30)	鹿児島県佐多岬灯台の東南東約6海里 北緯30度58分東経130度50分	男性・54歳 二等機関士（傷病名）急性心不全	二等機関士が突然倒れ、意識不明に。船長から洋上救急の要請。ヘリMH962が機動救難士2名を同乗し、鹿児島航空基地を出発。途中医師1名・看護師1名を同乗し、後に該船と会合、患者を揚収した。その後ヘリは谷山ヘリポートに到着し、患者を救急車に引き継いだ。鹿児島徳洲会病院にて死亡確認（死因：急性心不全）。
平成21年12月2日(00:31)	東京都八丈島の南東約122海里 北緯31度58分東経141度57.9分	男性・62歳 船長（傷病名）脳内出血	船長が倒れ、意識はあるがろれつが回らず右腕が動かないとの連絡が入った。医療機関より助言を受け、該船から洋上救急を要請。特救隊員3名が同乗したヘリMH805、医師2名・特救隊員2名が同乗した飛行機LAJ500が羽田空港を出発。その後ヘリは八丈島空港を出発し、該船と会合。患者を吊り上げ揚収し、八丈島空港にて待機していた飛行機に引き継いだ。飛行機は羽田空港にて患者を救急車に引き継いだ。